

第21回（平成23年度）

小 泉 八 雲

顕彰文芸作品コンクール入選作品集



焼 津 市 教 育 委 員 会

焼津を愛し
焼津を著した

文豪

小泉 八雲

ラフカディオ・ハーン



焼津に関連する八雲作品

『霊の日本』 「焼津にて」

『日本雑記』 「乙吉のだるま」

「漂流」

「海辺」

『影』 「夜光幻想」

『日本——一つの解明』

「地域社会の祭」

その他

「畏怖」

はじめに

昨年三月十一日に発生しました東日本大震災は、被災地に甚大な被害を及ぼしたばかりではなく、日本全土の全ての人々に多くのことを考える契機となりました。

今年度二十一回目を数える小泉八雲顕彰文芸作品コンクールの応募作品にもその影響は表れ、八雲原作の「稲むらの火」関連著作の読書感想文など震災に関わる作品が多数見られ、震災時の体験や感じたことが記されておりました。

そのような作品を含め、今年度は百二点の応募がございました。御応募いただきました皆様方に厚くお礼申し上げます。

本コンクールの審査は、小学生・中学生・高校生・一般の部に分けて行われ、一般以外は、学年も考慮されました。その結果、二十六点の作品が入選作品として選ばれました。

このたび、入選作品と御応募いただいた皆様の御名前を掲載した冊子を発刊いたします。ぜひ、御一読をお願いします。

今回の募集にご協力いただいた各学校の先生方並びにご多忙の中を作品の審査に当たっていただいた審査員の先生方に厚くお礼を申し上げますとともに、今後とも小泉八雲顕彰文芸作品コンクールの募集に皆様方の変わらぬご支援をお願い申し上げます。

焼津市教育委員会

教育長 塩 沢 英雄

第二十一回(平成二十三年度)小泉八雲顕彰文芸作品コンクール入選作品集

目次

はじめに

焼津市教育委員会 教育長 塩沢英雄

小学生の部

最優秀賞	「雪女」と「人魚姫」——比較して考えたこと……	豊田小	六年	合津廉之輔	1
優秀賞	命を救った稲むらの火……	大富小	五年	飯塚 勇氣	4
	小泉八雲から学んだこと……	黒石小	四年	安野 紫陽	6
奨励賞	津波……	豊田小	五年	鈴木 健斗	8
	八雲の雪女をさがして……	小川小	四年	向坂 彩乃	10
	人のいのちも大切にするやさしさ……	焼津東小	三年	山崎すみれ	12
	愛媛とお袖の乳母ざくら……	藤枝小	五年	藪崎 葵	13
	小泉八雲……	港 小	五年	鳴海 桃花	15
	ぼくと八雲……	大富小	五年	小林 海月	17

中学生の部

最優秀賞	つながり……	東益津中	二年	片山 慎也	19
優秀賞	小泉八雲の怪談……	港 中	二年	佐藤 知樹	22
	焼津を見つめて……	豊田中	一年	鈴木 一世	24
奨励賞	「乙吉のだるま」と「漂流」を読んで……	港 中	二年	堀江 尚弘	27
	八雲さんのステキな作品を読んで……	港 中	一年	村山菜奈子	30
	「雪女」……	豊田中	一年	菅原 唯	32

高校生の部

最優秀賞	八雲のさくら……	焼津高	二年	原川 愛未	35
------	----------	-----	----	-------	----

一般の部

優秀賞	「雪おんな」を読んで……	藤枝順心高三年	小野 里奈	38
奨励賞	『小泉八雲集』を読んで……	藤枝順心高三年	加藤 愛理	41
最優秀賞	浦島違い——『万葉集』と「夏の日の夢」——	埼玉県越谷市	森 とし子	45
優秀賞	神が在す郷……	静岡県焼津市	川合 信行	48
	なんぼう……	静岡県焼津市	山梨 明彦	50
	昭和に生まれて思う……	神奈川県横浜市	杉山 令子	51
奨励賞	命の恋歌……	千葉県流山市	葛岡 昭男	54
	時空……	静岡県藤枝市	山川 愛子	55
	「漂流」を読んで……	静岡県焼津市	八木ふさ子	58
	八雲と四季……	静岡県焼津市	早川 博子	60

入選以外の応募作品一覧

審査を終えて……	審査員長	大澤隆幸	61
第二十一回(平成二十三年度)小泉八雲顕彰文芸作品コンクール審査員			69
第二十一回(平成二十三年度)小泉八雲顕彰文芸作品コンクール要項			70

資料編

小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の生涯……	73
焼津に関連する小泉八雲作品「漂流」……	76
第二十二回(平成二十四年度)小泉八雲顕彰文芸作品コンクール要項……	84
焼津小泉八雲記念館紹介……	87

凡 例

本文では原則として常用漢字、新かなづかいを使用した。
八雲の作品名については、平川祐弘監修『小泉八雲事典』（恒文社・二〇〇〇年）
の表記を参考に、書名は『』を用い、単行本中の一章、短編集中的一編、詩集中
の一編は「」を用いる形で、編集者が表記を統一した。

小学生の部

最優秀賞

「雪女」と「人魚姫」——比較して考えたこと——

焼津市立豊田小学校 六年 合 津 廉之輔

一昨年、「雪女」の感想文を書いた時、最後の場面について、「この話を読んだ時、ほくは人魚姫ひめという外国の昔話に似ていると思った。もしかしたら雪女も人魚姫のように、巳み之吉のきちに裏切られたから消えてしまったのだろうか。」と書いた。

その後、改めて「人魚姫」を読んできたが、やはり似ていると思い、年代を調べてみた。

八雲が『怪談かいだん』を発表したのが一九〇四年。「人魚姫」は、一八三七年に発表されていた。もしかしたら、八雲は「人魚姫」を題材にしたのだろうか。

具体的に似ている所を探していくと、主に四点が自分の中に挙がった。

一点目は、どちらも日本という妖怪ようかいの話だという点だ。人魚姫はあまり妖怪という感じがしないけれど、人魚姫たちがあらしの時、しずみそうな船の前でいい声で歌うという場面や、人がこわがっている場面があったので、やはり妖怪と考えていいだろう。

二点目は、出会い方が似ている点だ。「雪女」では、ふぶきの中、巳之吉を助けてやることで出会い、「人魚姫」では、王子があらしの海でおぼれた所を助ける。細かく言えば雪女は巳之吉を殺そうとしたけど見逃してやったという点は少し違うが、やはり似ている。

三点目は、雪女も人魚姫も自分から、会いに来る所だ。「雪女」には、雪女の気持ちは書かれていな

いので、もしかしたら見はりに来たのかもしれないが、とにかく自分から来た。人魚姫は王子に恋をして、あきらめられずに来た。本当は、そのまま会わない方が楽だったのかもしれないのに。

四点目は、どちらも男に期待や信頼を裏切られ、消えてしまう点だ。「雪女」の場合は、あの夜の事を話してはいけないという約束を巳之吉に破られ、白くきらめく霧きりとなって消えていった。「人魚姫」の場合は、王子と結こんするという望みがかなえられずに海の泡あわになってしまった。その場で、ただ死んでしまったり、去って行ったりするのではなく、自然の中に消えてしまうというのは、すごく似た印象だ。

では、違う点はどうだろうか。

これは、主に一点しかないと思う。二つの作品は、視点が違うということだ。「雪女」は、巳之吉の立場から書かれているが、「人魚姫」は、人魚姫の立場から書かれていて、作品を大きく違ったものになっている。特に、「人魚姫」に比べると、雪女の元の生活、気持ち、その後どうなってしまったのかは全くわからない。もしかしたら、巳之吉に会いに行くのには、何か代しようにを払わなければならなかったかもしれないし、一緒に暮らす間には、人魚姫の足が痛んだような苦しみもあつたのかもしれないのだ。そして、人魚姫が人魚でなくなったように、雪女も雪女であることを捨てて、巳之吉と結こんしたのだろうか、だからその姿は消えなければならなかったのか。「雪女」には、何も書かれていない。

結局、人間が「こんなに恐ろしい目に会った」「こんなに不思議な目に会った」というふうに書かれるのが、怪談だから、雪女はなぞのままなのだ。

結論として、やはりぼくは、「人魚姫」は「雪女」の元になっていないかと考える。最初に書いたように、アンデルセンの作品の方がずっと前に書かれているので、八雲が知っていても全然おかしくない。もしかしたら、子供の時には、もう読んでいたかもしれないのだ。

『怪談』の解説の所には、「自分でも、序文の中ではつきりと述べていますように、ほとんどが日本の古典や中国の説話からの再話、作り直しです。」と書かれていたが、元々「雪女」のような伝説は見つからないらしい。『妖怪・怪奇・妖人事典』で調べると、八雲の家の女中の父親が、「大雪の夜、きこりが多摩川の渡船場とせんばで凍死した」話を聞き、それがモチーフになっていることも書かれていた。きこりが死んだだけでは、お話の元としては少な過ぎる気がする。「人魚姫」が元になったと考えるのはおかしくないと思う。

ただし、「人魚姫」と「雪女」は全く違った作品だ。一方は童話で、一方は怪談。同じような出来事を書いているのに、こんなにも違うことにおどろかされる。今回、「人魚姫」と比べることで、よりはつきりしたように、八雲の作品は、出来るだけ余分な所を削って書かれているようだ。そのことが、多くのなぞを残し、日本の怪談らしい雰囲気盛り上げる。

百年以上も前に、遠い国からやって来た八雲は、私達以上に日本らしい物語をたくさん書いて、今も私達を楽しませてくれている。

命を救った稲むらの火

焼津市立大富小学校 五年 飯塚 勇氣

五時間目の算数の勉強をしている時のことでした。机が少しゆれ、（めまいでもしたかな、それとも地しんかな。）と思いました。

先生が「机の下にかくれなさい。」と言い、ぼくたちは、すぐ机の下に身をかくしました。五へえのところに来た地しんに似ていて、おどろくような大きなゆれではありませんでした。長く、ふんわりとしたゆれでした。ゆれがおさまると、グラウンドにひなんして、家の人にむかえに来てもらって家に帰りました。

家に帰って、テレビから流れるつ波の映像を見ておどろきました。大きなつ波が町を飲みこむようにしておそってきます。とにかく速いのです。自動車でも逃げられません。あまりのすごさにただ見ているだけでした。このつ波で多くの人が命を失いました。東北の人たちは、まだひ害から立ち直れていません。

地しんの後に気をつけるのは、火災とつ波だと言われます。本当につ波が来たらどうしようと考えてみました。きっと、高台に逃げるだけで精一杯だと思います。どうしてよいかわからずに、こしがぬけて立ちすくんでしまうかもしれません。

そのようなじょうきょうで、冷静に行動できた五へえは、さすが長者だと思いました。海の波の動きからつ波を察知し、どうしたら祭りのしたくに夢中になっているみんなに知らせ、ひなんさせることができるかを短時間の内に考えました。ぼくには、たんせいこめて作った稲に火を放つ度きようはありません。大きな声でさけぶくらいだと思います。勇気があるなと思いました。そこには、知識や経験にもとづいた決断と行動力がありました。

その行動力のもとになる信念があったからこそできたのだと思います。それは、ふだんから「何より村人の命が大事」と考えて行動してきたからだと思います。命はお金や物にはかえられないからです。だからこそ、村の人たちにも「おじいさん」としたわれているのだと思います。

そんな五へえであっても、米のついた稲むらに火をつけ、村人が無事に集まるまでの時間は、長く感じられたことでしょう。ただ、ただ、村人の命を救いたがために夢中であったことと思います。孫の忠は、（おじいさんが気が違ってしまった。）と心配したに違いありません。自分の信念にしたがい、迷うことなく行動することはなかなかできることではありません。命を守る真剣さが強く伝わりました。ほくもそうありたいと思います、できることから声をかけていこうと思いました。

このお話には、元があり、それを書いたのが小泉八雲だと知りました。焼津にも住んでいたと聞いています。八雲が日本人のことが好きで、また、その考え方や心がわかるから、このお話を書いたのだと思います。そして、ボストンとロンドンの海外でも出版したと知り、うれしいとともに、日本も外国もなく、人の心の大切なことは同じであり、通じ合えることが、八雲によって証明されたのでした。

小泉八雲から学んだこと

焼津市立黒石小学校 四年 安野紫陽

今年の三月十一日に東日本大しんさいが起き、津波で大ぜいの方がなくなりました。この津波のひ害であらためて昔から津波について言いつたえられてきたことや、小泉八雲原作「稲むらの火」という物語りが見直されています。「稲むらの火」は浜口ごりようという実さいにいた人物をモデルにして小泉八雲が書いた物語、「生ける神」をもとに小学校の先生がほんやくして書き上げたものだそうです。

「稲村の火」は今の和歌山県ありだぐん広川町という小さな町でのお話です。私のそ父母がこの町に住んでいることから、私は以前広川町にある浜口ごりよう記ねん館（津波防災センター）に行ったことがあります。そこには、津波から命を守るための知しきを身につけるコーナーや、3Dでおそろしいほどの大はく力で津波を体験するコーナーなどがありました。ここで私は初めて浜口ごりようのことを知りました。しかし「稲むらの火」というお話は読んだことはありませんでした。今回初めて、「稲むらの火」を読んでみました。この話は、えど時代き州和歌山はんの広村に、浜口ごへえ（浜口ごりようのこと）という長者が村人たちを津波からすくったというものです。ごへえは、村人たちがほう作をいわうお祭りの用意をしている様子を高台にある自分の家から見えていました。その時ごへえは、地しんによるゆらゆらとゆれを感じました。海を見ると波がおきの方へしりぞいて海のが見ええました。いつもの海とはちがっていました。その時、ごへえは、自分のおじいさんから聞いた海にまつわるできごとの

話を思い出しました。ごへえは、取り入れを待つばかりの大切な稲むらに急いで火をつけました。この火に山寺のこぞうが気づいて早がねをつきました。村人たちはかねの音を聞いてはじめて稲むらの火に気づき高台に全員集まりました。その直後に村全体をのみこむほど大きな津波がおしよせました。ごへえは村人たちの命をすくい、感しゃされたというものです。

私は、村人たちやごへえの大切な稲むらに火をつけるなんてすごいことをするなと思いました。でもわたしがごへえだったならそんなことできないと思います。ごへえだって大切に育てた稲むらに火をつけるなんてとてもつらかったと思うけど、村の人の命にはかえられないからやってよかったと思います。とてもすごいことをしたなと思いました。それにごへえは、自分のおじいさんから聞いたことをおぼえていたので津波を予そくでき、すばやく行動ができたと思います。だから昔から言いつたえられてきたことはとても大切だと思いました。東日本大しんさいでも、家族にかまわず一人で高台にのげるという「津波てんでんこ」の教えで中学生が、自主てきにひなんして全員ぶじだったそうです。このことから津波とごへえのエピソードを書いた小泉八雲の「生ける神」は、重ようだと思えます。静岡県やいづ市も東海地しんによる津波が発生するかもしれないといわれています。やいづにゆかりのある小泉八雲が津波の話を書いたというのは、ふかいえんを感じました。私はこれからも小泉八雲のほかのお話も読んでみたいし、もっと八雲について知りたいです。

津波

焼津市立豊田小学校 五年 鈴木健斗

「ウー。」と大きなサイレンが鳴った。

僕は、とてもこわかった。学校の帰り道、地震が起こった。はじめ何のサイレンかわからなかった。放送が流れて津波だと気付いた。

でも、僕は、避難せず、友達の家遊びに行ってしまった。夕方、家に帰ってから、テレビを見てびっくりした。

初めて見る津波。高い堤防をのりこえて、町を津波が飲みこんでしまった。車や家や全部が流されていてとてもこわかった。

もしも僕の住んでいる焼津だったら、どうなっていたんだろうと思っただらぞっとした。

僕は、そんなこわい津波を見たので、その津波から、命を救った「稲むらの火」って何だろうと思った。

五兵衛は、高台の上に住んでいたから、海から、津波がやってくるのが見えたんだ。

人をおどろかすような地震ではなく、長いのろい、ふんわりとしたゆれだと書いてあったけれど、三月十一日に起きた地震も、長い地震で、僕のお母さんは、ゆらゆら揺られて、よってしまったと言っていた。同じような地震だったのかもしれないなあと思った。

五兵衛の生きていたころは、テレビなんか無いので、津波なんてどうしてわかったんだろう。そして、

村の人たちを救うために、自分の家にある大切な稲の山に、火をつけて燃やしてしまっただらびっくりした。

最初、何で、燃やしているんだろうと思った。せつかく育てて実った稲を、やっとう刈って積んであったのに、燃やしてしまうなんて、孫の忠も、おじいさんが気がちがってしまったんだと思っただけ、僕もそう思った。

その火を見て村の人たちが、高台にやっできて、みんな助かるとは、思わなかった。

初めに、山寺の小僧が気がついて、鐘をつき、ゴーンッゴーンッと鳴りひびいた。

それが、きつと僕が、地震の時間聞いた、ウーという、サイレンのかわりをしたんだと思った。鐘が鳴らなければ、みんなが気がつかなかったのかもしれないと思うと、小僧さんが火に気付いてくれて良かった。本当に、良かった。五兵衛は、えらいと思った。自分の宝物を燃やして村の人たちの命を救った。稲むらの火が、こうして、命を救ったということがわかった。

そして、解説に、実際に、モデルになった人がいたと書いてあり、すごい人だなあと思った。安政の東海地震と南海地震が、一日おきに続けて起きたと書いてあり、本当にこわくなってしまった。焼津では、安政の大地震で、東名高速道路の方まで津波が行ったと昔から言われていて、僕のお母さんは、その言葉を信じて、今の家に引越して来たと言っている。いつ起きてもおかしくないと言われていて東海地震なので、本当にこわいけれど、すぐににげられるように、今度の避難訓練にも参加しようと思った。そして、今も避難生活をしている東北地方の人たちにも、頑張っと思っただらよかった。

八雲の雪女をさがして

焼津市立小川小学校 四年 向坂彩乃

わたしは、家ぞくで「冬の富士山ろくアニマルトラッキング」（雪山で動物の足あとをさがす体験学習）に参加しました。前日にふりつもった雪で、見わたすかぎり真っ白。キラキラかがやいていました。も作とみの吉になった気分で、ひざ上まである雪をふみしめ進みます。何もない白い世界に足あとが点々とつきキュッキュクザクザクという音と息づかいだけがひびきます。白い世界をよごしてしまう、わるいことをしているような、心がザワザワします。枝につもった雪がドドッとおちるたび、おこられた時のようにビクッとします。

ブナの原生林を風が通りぬけると、チラチラと小雪がまい、光があたり、キラキラかがやきます。きつと雪女が歩いた後は足あとも音もなく静かなだろうなあと考えていると、急に背中がゾクゾクしてふりかえります。今あの木の下に雪女が立って、きれいな雪山をふみあらず人間、わたしの方をじっと見ている。つめたい目で、山の動物をいじめないか見はっている。そう感じました。

この時、なせも作はころされたのだろう、わるいことをしていないのに。というぎ問がとけたような気がしてきました。

すがたは見えないけど、アカネズミ、キツネ、シカのむれ、イノシシなどの足あとは、雪の上のこつています。動物たちはこの雪の中で生きています。ブナ林や沢にはエサとなる草や実はありません。草

食動物は木のかわや、雪の下をさがして、必死で生きています。肉食のキツネは小さなネズミをおいかけます。生きるということ、人間いじょうにきびしく、くるしいと思います。このきびしい自然の雪山に人間は入ってはいけません。山や林の木一本でも切ってはいけません。富士山は山の神様と動物がすむ世界のように思います。

切ってはいけない木を切ってしまったのだろう。動物たちの命を守る大切な木を切ったのだろう。雪女は冬の山で生きる動物や木や草を守る女神様だと思います。

富士山の林にも春には花がさき、夏には虫がなき、秋にはドングリが実ります。動物たちは春には、子どもをうみ育て、雪とたたかいます。

雪女は、みの吉と出会い「恋」をして『春の女神』になり、けっこんして、太陽のような『夏の女神』になり、子どもをうみ、そだて、実りの『秋の女神』になれてしあわせだったと思います。

でも山に冬がくるように、みの吉が話をしてしまい『冬の女神』にもどってしまったと思います。わたしのお母さんも、おこる時は冬、わらっている春、一所けん命は夏、ほめてくれる時が秋です。

みの吉に子どもを守り育てるように言い「神様の世界」にもどって行ったのだろう。今でも、山とそこに生きる動物たちを守っていると信じています。

雪女をおこらせたり、かなしませたりしないように、地いきの清そう活動はせつきよくてきにさんかします。草や花、木を大切にします。

奨励賞

人のいのちも大切にするやさしさ

焼津市立焼津東小学校 三年 山崎 すみれ

こいずみやくもさんの作品は、こわい話や、少しむずかしい話ばかりかなあと思っていたけれど、こいずみやくも記ねん館で見つけた『いなむらの火』という本は読めそうかなと思って読んでみました。わたしは、大切なものをぎせいにし、村の人びとをつなみからすくったしょう屋さんが、とてもいい人だなあと思いました。しょう屋さんは地しんがきたことに気づき、まつりのしたくで地しんに気づかなかつた村の人たちに、つなみが来る事を知らせるために、大切ないなむらをもやし、おかの上まで村の人を全員つれてきたのです。わたしは、自分のいのちだけでなく、人のいのちもたすかるように、自分がやれることをいっしょうけんめい考え、せいっぱいやるしょう屋さんがとってもやさしい人だなあと思いました。

5ヶ月前に、東日本大しん災がおきました。その時つなみで死者一万五千人、行方不明者五千人い上になりました。テレビでつなみのえいぞうを見た時は、町をのみこむほどのなみでびっくりしてしまいました。このつなみかもしやいづにきていたらと思うとぞっとしてしまいます。

この物語の中で、しょう屋さんはじつさいに人をすくいました。そしてこいずみやくもさんは、その話を本に書き、みんなに読んでもらうことよって、未来のぎせい者をへらす手だすけをしようと思っただんじやないかと思えます。二人ともやりかたはちがうけれど、自分のことだけではなく、人のいのち

も大切にするやさしい人だなあと思いました。

今回の地しんの時、この物語を知っていた人はどのくらいいたのかなあと思いました。ニュースで、地しんの後すぐにようち園バスを、海の方へ向かって走らせたために子どもたちがぎせいになったといっていました。高い場所にようち園はあったのに、わざわざつなみに向かって行ったなんて、この物語を知っていればそんなことにはならなかつたんじやないかなと思っていました。

わたしがしょう屋さんや、こいずみやくもさんのように、人のためにできることは少ないかもしれなけれど、いつ地しんや、つなみがきてもこまらないように家の人と話し合ったり、月日がたつても東日本大しん災のことをわすれないでおきたいと思えます。

この『いなむらの火』という本を地しんの前に読んでいたら、ここまでいろいろ考えなかつたと思います。今、この本を読むきかいに出版えてとてもよかつたです。

奨励賞

愛媛とお袖の乳母ざくら

藤枝市立藤枝小学校 五年 藪崎 葵

「乳母ざくら」という話は私が生まれた愛媛県がぶたいとなつた話です。私は愛媛が、とても優しいふんい気だと思っています。だから愛媛の怪談話があることにおどろきました。「愛媛の怪談話、どん

な話なのかな。」と、気になったので読んでみました。乳母ざくらは、私が今までに読んだことのある小泉八雲の作品とは少しちがう物語でした。

三百年以上昔、愛媛県の温泉郡朝美村という所に、おつゆという十五才の重い病気にかかっている女の人がいました。おつゆの母親がわりとなって乳をあげていた乳母のお袖は、おつゆが病気だと知ってただの一時も休まずに、お不動さまにお百度まいりをしました。そのおかげでおつゆの病気は治ったけれど、それとひきかえにお袖が病気になり、お不動さまに約束した桜を植える前に亡くなってしまいました。その後、おつゆの両親によって約束どおり桜の木が植えられました。その木の花は決まってお袖の命日にさき、色が女のちぶさが乳でしめっているようだから、乳母ざくらとよばれるようになったという話です。

「雪女」などの他の話は、化け物が出てくる話が多いのですが、おそろしいのですが、乳母ざくらは、お袖がしたおつゆへの愛情から生まれたお話なので、おそろしくはない話だと思います。私は、おつゆのためなら自分がどんな風になってもかまわないというお袖の思いは、本物の生んだ母親と同じような愛情だと思っています。この愛情は、乳母ならだれにでもあるわけではないのだと、自分が母親になる時のことを想像しました。私だったら、自分の娘のために命をひきかえにするなんて、できるだろうかと考えました。私は自分と重ねて考えると、お袖はよっぽどおつゆに情があったのだとわかりました。八雲さんは、わが子を平気で人買いにさらすようなひどい親がいた時代、本当の自分の子供でもないのにその子のためにお百度まいりまでもするお袖のような人の情に、おどろきとすばらしさを感じながら、「乳母ざくら」を書いていたと思います。

私は、大人になって子供を生んだ時、お袖のように愛情を持って育てていきたいです。また、今度愛媛に行った時に温泉郡朝美村へ行つて、乳母ざくらがさいていた場所を見てみたいです。そして、乳母

ざくらの話をもっともっとくわしく知りたいと思います。

奨励賞

小泉八雲

焼津市立港小学校 五年 鳴海桃花

小泉八雲の作品の中でも特に有名な「耳なし芳一」というお話が好きです。この話だけではありませんが、小泉八雲の怪談かいだんというのは、ほかとは一味違うところがあると私は思います。たとえば、芳一は耳を取られるし、「幽霊ゆうれい滝たきの伝説」の最後では、子どもの首が、いつのまにかもぎとられたりするのですから。私は、こんな悲惨ひさんな話を小泉八雲の怪談でしか読んだことがありません。しかし、怖こわいだけではないところが、他の怪談と八雲の怪談の違うところだと私は思うのです。

芳一は、目が見えませんが、琵琶ひわはとても上手に弾くことができます。貧乏びんぼうな芳一を阿弥陀寺あみだじの和尚おしょうさんが寺においてかわいがったのは、芳一の弾く琵琶の音色がだれにも負けないほど美しく、たいそう心をひかれたからでしょう。目が見えないのに琵琶を弾く芳一もすごいのですが、そんな芳一をかわいがる和尚さんおしょうさんもえらいなと思います。そんな和尚さんですから、芳一が（何か魔性まじょうのものにとりつかれたのでは。）と、異変いへんにすぐに気付けたのでしょう。芳一の体中に一生懸命けんめい般若心経はんにゃしんぎょうを書いたのに、なんと耳には書き落としたために芳一は耳を引きちぎられてしまいます。ここだけ見ると、とても怖く、

悲しい話です。

ですが、八雲さんの怪談というのは、ただ残酷な話というわけではないのです。どの話も一つ一つ、文の細かなところまで読み深めていくと、なぜそうなってしまったのかが、よくわかるのです。

心を持たずに八雲さんの作品を読んで、コワイとかグロイとしか思わない人もいるかもしれませんが。その人たちには和尚さんの言いつけをしっかり守って耐える芳一の姿に平家の亡霊の悲しみや怖さが見えてこないにちがいありません。私には、ただの怖い幽霊話ではなく、とても人間味があふれた作品だとわかります。

そんな素晴らしい作品を書いた八雲さんは、焼津がとても気に入っていたそうです。夏は、焼津に来て海で泳いでいたということです。そんな焼津にかかわりのある八雲さんを知らない焼津の人がいます。私は、それがとても残念です。私たちの町「焼津」ととても縁のある小泉八雲さんをみんなにもっと知ってほしいです。

私は、八雲さんのことをたくさん調べました。その結果、八雲さんがとても身近に感じられるようになりました。八雲さんの歩いた道を通ると、目の前に彼がいるような感じにさえなります。そんな私には、一つの願いがあります。かなう望みではないのですが、一度でいいから八雲さんと話してみたいのです。そして、色々なことを聞いたり、今の焼津のことをいっぱい教えてあげたいです。八雲さんは、もうこの世にはいないけれど、私をはじめたくさんさんの人の心の中でずっと生き続けていくと思います。

奨励賞

ぼくと八雲

焼津市立大富小学校 五年 小林海月

ぼくも好き八雲が愛した焼津の海

あつい夜八雲のかいだんききめあり

守ろうよ八雲が好きな焼津の海

もえてるぜぼくも八雲も焼津っ子

八雲作かいだん話身氷る

中学生の部

最優秀賞

つながり

焼津市立東益津中学校 二年 片山 慎也

僕が小泉八雲という人物と最初に出会ったのは、確か小学三年生頃の夏、本が大好きだった僕が昼休みに図書室へ本を借りに行った時だったと思う。

本棚の横にはあってあったポスター。そのポスターは、背景が青い海でそこに大きく顔が描かれていた。遠く向うを向いている瞳、高い鼻、鼻の下には立派なひげが蓄えられていた。その人物が小泉八雲という作家であることをその後知ったが、何せ小学三年生だった僕には、気難しそうな顔をしている人物の作品なのだから難しく、僕には関係のないような作品だろうと思ったきり、読もうとはしなかった。

それから次に僕が『小泉八雲』に出会うのは、当分後のことだったと思う。それは昨年のことだから、僕と彼との最初の出会いは約三年くらいたっていた。学校の授業で行なった地域のことを調べる「総合の時間」に友達が調べていたのを見たり、その発表を聞いたりしての中で僕は小泉八雲について初めて詳しく知ったのであった。その時に気づいたことだが、実は小学三年生よりも前に「雪女」という作品を通して、小泉八雲に出会っていたのだ。そんな前から彼の作品に出会っていたということは、小学三年生の頃の僕が思っていたよりも全然、気難しい人ではなかったということであろう。

『八雲は、焼津の海が好きだった。』『乙吉さんという友人が焼津にいた。』この二つは、友達の発表を聞いて心に残った言葉だ。正直、彼が焼津の海が好きだったということは素直にうれしい。明治と

いう時代に生きたギリシア人と、平成という時代に生きている日本人。生きた時代も、生まれた場所も違うのに同じことを感じられる。これは、すごいことだと思う。

『八雲は、焼津の海とギリシアの海を重ねていた。』と言われていたが、ただ単にそれだけではないと僕は思う。確かに、故郷の海と重ねれば愛着はわくが、僕はそれに加えて彼は焼津の海に大きな魅力を感じていたからであると思う。

今でも夏には、多くの人々が焼津の海を訪れている。その人達と同様に僕は、彼も焼津の海の魅力に取りつかれた一人なのだと思う。でも、それだけではないとも感じる。

最初に書いたように、彼の友人である乙吉さんがいたからというのもあると思う。多分、乙吉さんは、すごく優しく温かい人だったのだろう。そんな乙吉さんの魅力にも引きつけられて、毎年焼津を訪れていたのではないかと考えられる。

このように考えてくると僕は八雲とたくさんのつながりをもっているように思える。僕を含めて焼津に生活している人は全て彼とつながりがあり、普段は気にもとめないで彼のゆかりの場所の前を通っていることになるだろう。

百年くらい前にこの焼津という町を舞台にして小説を書いたり、故郷を感じて海で泳いだり、友人の温かさを感じたりしていた八雲。そう思うと小泉八雲という人物は今を生きている人と変わらず、同じような夏を過ごしていたんだなあと感じる。

今、僕が何気なく過ごしているこの焼津という町も、彼にとつては特別な場所だったのだろう。そういうふうには彼が感じてくれていたとすれば、それは焼津が、どんな人をも引きつける魅力のある町なのだろうと思う。そう考えると彼とのつながりは今でも深く、百年以上前の人なのに今でも生きているような彼を感じることができると。またそれは、小泉八雲という人物も魅力のある素晴らしい人物だったからではないか。

らではないか。

拝啓、小泉八雲様、僕は、あなたが生きた約百年後の焼津に生きている中学生です。今でもあなたとのつながりは、焼津に生きていけば誰でも感じるができます。焼津の海は、あなたの愛した百年前と変わっていないのでしょうか。焼津は、魚の町として発展してきました。あなたの生きたその時代もおいしい鰹など食べることができたでしょう。今も、おいしい魚を食べることができます。そう言えば、小泉八雲記念館という場所もできました。そこへ行けば、あなたが今でも尊敬されていることがわかります。焼津の人達は、あなたのことを身近に感じることができます。それは、焼津の町があなたの生きた百年前から変わらない温かみがあるからでしょう。

最後に僕は、あなたが焼津を愛してくれていたことをとてもうれしく思います。

小泉八雲の怪談

焼津市立港中学校 二年 佐藤 知樹

「怪談」と言えば、誰もが小泉八雲のことを知っているでしょう。

僕が最初に小泉八雲の怪談を読んだのは、小学六年生の時でした。きっかけは学校の図書室で八雲の本が大きく紹介されていたからです。そしてその読んだ本の話が心に残るほどの怖い話でした。

その後中学二年生になった僕はもう一度あの怖い話を読みたくまりました。そして小泉八雲の読書感想文を書こうと思いました。

その話が「幽霊滝の伝説」というもので、この内容を簡単に説明をすると、「勝」という主人公がお金の欲に負けて神社の賽銭箱を持ち出し、心臓がなくなってしまうという怪談です。その中で少し変わった書き方や表現の仕方がいくつかありました。

一つ目は自分がもう死んでしまいそうな所から始まるからです。普通の怖い話は元気な状態から死んでしまうといったものが特に多いです。そして死んでしまいそうと書くのではなく、『うすれゆく意識の中』と表現されています。このような書き方をすると読者が状況を知りたくなくなり、もっと読みたくなると思います。なぜなら僕もそのような気持ちになったからです。

二つ目は幽霊の声が『おい、お勝。』だけということでした。名前だけで用件を言わない所がまたこのお話の怖いところです。誰かに呼ばれる時、「知樹！」というより「知樹、宿題について話があるか

ら来なさい！」とではやはり用件を言っている方が安心感があります。用件を言わないと状況が読み取れず心がとても不安になります。

最後の一つは小学六年生の僕が特に怖いと思った内容です。それは『背中穴があき、心臓がなくなってしまった。』という文です。これは単に死んでしまいそうと書くのではなく『心臓がない！』と書かれているので、身体の穴が空いている状態を想像してしまい心に残るほどの怖い感じが伝わるのです。

僕は、今もその怪談を読むとその怖さが心の中に残ります。

そこまで読者に怖いと思わせることができるのは、読者が物語の主人公を演じているように思えるからだだと思います。どうしたら怖くなるかを考えて表現の仕方を工夫しているのです。改めて小泉八雲はすばらしい怪談を書ける人だと実感しました。

他にも変わった表現はありましたが、やはり印象的だったのはこの三つでした。

死に方について他の表現もされていましたが、それは、「忠五郎の話」の中の『血がない！』と表さされている所です。これも、死んでしまいそうと書かれていません。

初めてこの怪談を読んだ時も、怖いと思いました。

僕はあることに気がつきました。それは、『心臓がない！』と『血がない！』と書かれていた所で、両方とも最後が『ない！』でおわっていることです。このように書くことで作者が伝えたいことが率直に伝えることができます。そしてもう一つ、それはビックリマークがついていることです。これを使うことによって文の最後のアクセントを強くすることができますので、読者を「怖い」とより一層思わせることができるのではないかと思います。

また、これも工夫の一つだということが感じられました。

僕はなぜ、小泉八雲がここまで怖い怪談が書けるのかを考えてみました。そして頭に浮かんだのは、八雲が妖怪などの立場から気持ちを考えているのではないかと思いました。そうすることによって、よりリアルな感じが出て怖くなるのだと思います。

読書が嫌いだった僕がここまで一人の作家が書いた物語を読むのは初めてです。それは、それだけ興味をもてるように書いてあるということだと思います。

僕はこの本を見つけ、「幽霊滝の伝説」という話を読んだ時、恐いとおもしろいという気持ちがあったのだと思います。

そして読み手にもっと読みたくなる書き方や、聞き手にもっと聞きたくなる話し方を僕もやってみたと小学校の時から思っていました。それが小泉八雲の怪談だと心の底から思いました。これを良い例にして僕もこのような文章を考えていきたいです。

優秀賞

焼津を見つめて

焼津市立豊田中学校 一年 鈴木 一世

焼津という土地柄が気に入って夏休みになると訪れていた八雲。

僕も同じように父のふるさとである松原村が大好きで、毎年訪れるのが楽しみだ。たまに訪れるだけ

なのに、村の人の温かさで自分がそこで生まれ育ったような気持ちになる。きっと八雲もそうだったのだろうか。

きれいな秋川で泳ぎ、釣りをしても楽しい。田舎の人は、みんな優しく言葉をかけてくれる。僕が小さい頃、カブトムシやクワガタに夢中になっていた。その頃は、お豆腐屋さん、食堂と行く先々で虫をわけてくれた。そんな思い出が、松原村を好きな気持ちにしてくれた。こんな思いが、八雲の焼津への思いと重なり、親しみを感じた。

八雲は、特に焼津の海が気に入っていたようだが、僕は幼い頃泳いだきりだ。最近では行かなくなってしまった。石がごろごろして、灰色の海岸を珍しがっているけれど、僕は他の海をあまり知らないの、そんなものなのかなあと思う。

焼津周辺の海岸線は砂浜も灰色で、海とはみんなこんなものかと思っていた。白い砂浜があると知った時は驚いた。僕は、行ったことがない。焼津の海は、暗い感じがするのだろうか。『まるでトカゲのように、町はくすんだ色調を帯びて』と表現している。僕の住む町は、『トカゲ』かと、おかしくなった。ギザギザの青い山並みは、大崩海岸のことを言っているのだろうか。それが、くつきりと巨大な紫水晶のようだ。また、海岸線から見える富士山は、今でも素晴らしく美しい。

百年ほどの年月を経ても変わらない姿が残っていると思うとうれしい。とても興味深く感じたのは、お盆の灯ろう流しのことだ。八雲が『古いお盆の習慣は、急速に消えつつある。』と言っているが、百年以上前からそうだったのであれば、今日まで残っているはずがないと思つた。曾祖父の初盆では、流したと聞いて驚いた。いつ頃なくなったのだろうか。

丁度、回覧板が届いた。そこには、お盆のお供え物の回収場所と日程が書かれていた。そして、燃える物と燃えない物をしっかり分別して出すように注意書きされていて、地球環境のことを思いやっ

た。

そう、百年後には、こんなふうに変えてしまおうんだ。八雲は、どう感じるんだろう。僕は、灯ろう流しを見てみたいと思った。八雲のように、暗い夜の海に灯ろうを追いかけて泳ぐ勇氣はないけれど、きつと幻想的で美しいのだろうと思う。焼津の海を泳ぐ八雲の姿が、目に浮かぶ。

今では、とても考えられない。海に何かを流すなんて、環境汚染になってしまう。焼津の海岸へ行くゴミがいっぱい散らかっている。僕が保育園に通っていた頃は、毎年焼津市内の保育園の保護者一同で、海岸の掃除をしていた。みんなで協力しないと美しい自然環境を保つということが難しいのだろうと思う。そう考えると人間が、地球環境を変えてしまうことが、恐ろしいと思った。

人が行う文化などは、お盆の行事のように、時代と共に、姿を変えて行ってしまうものだと改めて気づかされた。僕たちが、今、当たり前のように行っていることも、百年後の未来にはなくなっているものもあるんだろうな。何だか不思議な気がした。

変わらないものは何だろう。海や山のような自然だろうか。富士山の姿は今も美しいし、海はずっと海のままだ。

八雲は、本当に海が好きなんだと感じた。僕も、海は好きだ。あまり泳がないけれど、よく釣りをしに行く。夜の海にも行ったことがある。ザッザー。ザブーン。と音がする。少し不気味で怖い感じがする。

『海には魂があり、耳がある』という言い伝えがあるそうだけれど、僕は、聞いたことがなかった。死者の言葉が海のどよめきになるだなんて恐ろしいが、海を音楽に例えるのは素晴らしいと思った。僕も、今すぐ海に行つてメロデーを聞いてみたくなった。

焼津から海を切り離すことはできない。特産物も海の恵みだし、海に関連した職業も多いし、行事も

多い。この焼津の海をずっと残していかなくはならないんだと思う。最近では、地球温暖化現象が起きていて、自然も変化してしまっているようだ。八雲が言うように、百万年後にも、ハーモニーとメロデーをかなでてほしい。そのためには、僕たちに、何ができるのだろう。難しくてもよくわからないけれど、まずは海を汚さないようにしたい。

焼津のことをこんなふう伝えてくれて八雲に感謝したい。また、見つめさせてくれて、ありがとう。

優秀賞

「乙吉のだるま」と「漂流」を読んで

焼津市立港中学校 二年 堀江尚弘

この夏休みに僕は小泉八雲の作品を読むことに決めました。僕が小泉八雲の作品を読むことにした理由は、僕がまだ一年生のときに学校の行事で地域探訪という焼津市内のいろいろな名所を回ったのがきっかけでした。

そこで僕は小泉八雲滞在の家跡という所に行きました。その小泉八雲滞在の家跡を一目見たときから八雲さんのことをもっと知りたいと思ったからです。なので今回の作文を書くことに決めました。

この作文のために僕は、小泉八雲という一人の人物をインターネットや本などでたくさん調べました。すると、この僕たちが今住んでいる焼津を題材にした作品を二つ見つけることができました。

一つは「乙吉のだるま」というお話で、もう一つは「漂流」というお話です。この二つの作品を知っている人はとても少ないと思います。なぜなら小泉八雲の作品はともたくさんあるからです。「雪おんな」や「耳なし芳一」などの有名な作品なら知っている人が多いと思います。ですが、知らない人が多いからこそ、僕はこの二つの作品の良さをこの作文に書きたいと思います。

「乙吉のだるま」は二つに分かれています。最初は、いろいろな説明が書いてありました。雪だるまの説明やこの日本の雪のときの景色のこと、それに仏の教えのことや以心伝心の意味など難しい言葉や漢字がたくさん出てきて、読むのにもすごく時間がかかりました。どうやらこの「乙吉のだるま」というお話は第一部がいろいろなこと、説明で第二部が本文みたいな感じになっているようです。

第二部では、実際に小泉八雲が体験したことについて書かれています。昔、八雲が魚屋の主人である乙吉という人に乙吉の家の二階を貸してもらったことや乙吉の家の神棚に置いてあった片目しかない「目なしだるま」のことについてつづられています。

僕がインターネットで調べたところどうやら八雲も幼い頃に事故で片目を失っているそうです。きつと八雲は片目しかないだるまを見て、とてもかわいそうに感じていたのだと思います。八雲はとても優しい人だということがわかります。片目しかないだるまに驚いた八雲は乙吉に『だるまは目を入れてもらうためにがんばっている。』と聞いて、とても安心したそうです。

八雲は乙吉にとっても安く泊めてもらい、とても感謝していたそうです。しかし八雲は二倍のお礼を支払いました。八雲が発発するとき、乙吉は片目のだるまにもう片方の目を入れました。八雲はとても安心して出発することができたそうです。僕は片目のだるまがもう片方の目を入れてもらえて、とてもよかったと思います。八雲と乙吉の二人の優しさが伝わってきました。とても良い作品でした。

「漂流」というお話は、「乙吉のだるま」のように二つに分かれてはいません。最初から、そのまま

本文に入っています。「漂流」は「乙吉のだるま」と違って少し怖いお話でした。

ある日のこと、その日は台風が近づいていたそうです。八雲は、強風に吹きさらされながら浜辺の防波堤の上に座って、大波の砕け散る様をながめていたそうです。そのとき八雲のそばには、天野甚助という老人が座っていたそうです。波のすごい音に八雲は『なんだか、すこしこわくなってきたよ。』と言ったそうです。すると、甚助はにやりと笑いました。そのとき甚助は八雲に『これよりも、もっとひどい荒海で二日二晩泳いだことがある。』と言ったそうです。つまりこの「漂流」というお話は、天野甚助という老人が昔荒海で二日二晩漂流したときのことをつづっている作品になっていると思います。

この作品には、漂流の恐ろしさがたくさん書かれています。僕はこの作品を読んで、とても天野甚助さんはすごいと思いました。なぜなら最後まで諦めないで泳ぎ続け、助かることができたからです。ぼくも天野さんのように何事にも諦めないようにしたいです。

最後に、僕はこの小泉八雲さんの二つの作品を読んで見てとても小泉八雲という一人の人物が大好きになりました。もちろん八雲さんの作品は好きですが、それ以上に僕は八雲さんの性格にひかれました。「乙吉のだるま」のときに片目しかないだるまを見て同情していた八雲さんを見ると、とても清く優しい心の持ち主ということがすごくよくわかります。僕もこれからの人生、目標とする人を八雲さんにし、八雲さんのように清く優しい心の持ち主になりたいです。

八雲さんのステキな作品を読んで

焼津市立港中学校 一年 村山 菜奈子

私は「耳なし芳一」を読んで、特に心に残った事が三つあります。

一つ目は、芳一の素直な性格です。親切な和尚が寺に来て住むように勧めたら、喜んで申し出を受け入れたし、侍と出かけた時に、「身分の高い方が自分の琵琶と語りを待っていてくれていたのだ、私はなんて幸せものなのだ。」と思っているからです。他にも、芳一は素直でいい人だなと思うことはたくさんありました。

二つ目は、芳一と和尚が互いに信じ合っていることです。和尚が、芳一は化けものにだまされていると気づいた時から、化けものが来る時には、一緒にそばにはいられないから一生懸命お経を書いてくれたし、和尚が言っていた『裏の縁側で待っていると良い。』『どんなことがあっても、返事をしてはいけないし、体を動かすこともしてはいけない。』ということも、しっかりと守ったからです。

三つ目は、誰もが涙を流してしまうという芳一の琵琶と語りを、私も聞いてみたいと思いました。きつと、琵琶を弾いているときは、芳一の気持ちや性格が語りに表れるから、聞いている方はひかれていくのだろうなと私は思いました。

次に「ろくろ首」を読んで、人というものはわからないなと思いました。見かけによらず優しい人もいれば、優しそうなのに怖い人がいるように、親切な木こりかと思っていたら回竜を食べようとねらっ

ているやつだったからです。

回竜の前では上品にしておいて、かげではみんなで良からぬことを考えていたから、卑きような奴らだなと思いました。そんなことをするつもりだったなら、最初から上品にする必要なんかなかったし、こそそこそとやっているなんて、最低だと思ったからです。

でも、回竜は強くて、あるじ以外の化けものは、みんな逃げていったし、結局、最後にはあるじにも勝ったから、やっぱり良い者は勝つのだなと思いました。そして、回竜が有罪と言われていたけれど、老人が無罪を証明してくれたから、「本当のこと」というのは、やがてわかるもののだなと思いました。

最後に、私は「雪女」を読んで、巳之吉は白雪に出会う前は、雪女のことには誰にも言わなかったのに、なぜ白雪にはしゃべってしまったのかなと思いました。そして、白雪は、幸せだったはずなのに、なぜ自分は雪女だと言ってしまったのかなと思いました。雪女が巳之吉を殺さなかった理由は、子どものためと言っているけれど、本当は巳之吉が良い嫁だと思って白雪を大切にしていたから、殺せなかったのだらうと私は思いました。雪女は、最後に子どもたちを大切に、大事に育ててと言っていて、子どもたちのことも、とても大切に、大事だったのに、なんで、出ていってしまったのだらうと思います。もし、ここで、自分は雪女だとは言わずに、「きつと夢だったんですよ。」と言っていたら、そのまま、巳之吉も白雪も、子どもたちも巳之吉のお袋さんも、みんな幸せだったらどう思うからです。でも、化けものには化けものの、決まり・約束などがあって、絶対に雪女の話は、誰にも言ってもはいけないと言ったのに、巳之吉がその約束を破ってしまったから、そうせざるをえなかったのかなとも思います。

私は、このお話を読んで、「約束」というものは守るためにあるものだから、絶対に守って、もしできない約束だったら最初からしないで、約束をした人を悲しませないようにしようと思いました。

この「耳なし芳一」「ろくろ首」「雪女」を読んで、小泉八雲さんは怪談が好きな方なのかなと思

ます。八雲さんの作品は、読んでいるうちにだんだんと、その世界に引き込まれていって、最後には少し考えさせられるというところもあって、不思議でもむしろいい作品でした。細かい景色や様子なども書かれていて、読んでいる私も、その世界に入っているような気がして、ぞっとしてしまいました。

八雲さんは、読者をお話の世界に引き込んでしまうくらいのステキな作品を書く方だなと思います。もっと、八雲さんの作品や、八雲さんのことを書いてある本を読んで、八雲さんのことをもっと知って、本を読むということがたくさん楽しめたらいいなと思いました。八雲さんの作品は、深い、すばらしい作品でした。

奨励賞

「雪女」

焼津市立豊田中学校 一年 菅原 唯

私は、中学一年生になって初めて「雪女」を読みました。「雪女」という題名は聞いたことがありませんでしたが、興味があまりなく、読むだけがありませんでした。

けれど、ある日、小泉八雲記念館へ行って「雪女」の本を見つけました。「読んで見たい。」という気持ち少しあったので、読んでみました。読んでみて最初に思った疑問が、「船頭が向こうの岸に舟をつないだまま、茂作と巳之吉を置いてどこかへ行ったのか。」です。

私が出した答は、「行ってしまった。」のではなく、雪女に連れて行かれたのだと思います。茂作と巳之吉を置いていったのは、茂作と巳之吉を殺そうとしていたからです。そして、茂作と巳之吉が寝たところで雪女が小屋に入って行き、茂作を白い息で殺している間に巳之吉が起きてしまい、茂作より先に殺してやろうと思いました。しかし巳之吉は年が若くてかわいいので殺すのを今はやめ、雪女を見たことをしゃべったら殺すことを言い残し、姿を消したのだと思います。

次に思った疑問は、「雪女が人間のお雪で巳之吉の所に現れたか。」です。雪女がお雪にならなくても、雪女のままで巳之吉が雪女を見たことを話すところが見えると思います。なぜなのか考えた結果、この考えが出てきました。雪女は、自分が巳之吉のお嫁さんになれば巳之吉は雪女に会ったことを話すのではないかと考え、お雪になったと思います。これが「雪女」を読んで疑問に思ったことと疑問に思ったことの私の考えです。

また「雪女」を読んで思ったことは、雪女はきっと子ども好きだと思います。子ども好きがわかる場面は、お雪が仕事をそこに投げ出して、『それはわたしじゃ。……このわたしじゃ。お雪じゃ。あのとき、ひとことでもしゃべれば命をとると、たしかに言うておいた。じゃがの、あすこにねている子どものことをおもうと、今となつては、そなたの命をとることはできぬ。こうなつたからには、せめて子どもを大切に、大事に育ててくださいや。子どもにもしもつらい思いをさせるようなことがあれば、その報いは、きつとこのわたしはがしますぞよ。』です。この言葉から私は、雪女は子ども好きと思いました。

二つ目は、巳之吉は初めて雪女に会った時、「恐ろしい」は百パーセント中九十パーセントであると十パーセントは「美しかった」だと思います。それがわかる場面は、雪女が巳之吉に近づいてくる時に思った『女の目は、ぞっとするほど恐ろしい目です。しかし、その顔は、ひじょうに美しいのです。』と、巳之吉がお雪に雪女に会ったことを話した時の言葉、『じっさい、おれは、夢にもじっさいにも、あん

なよく似た美しい女を見たのは、あのとき一どきりだ。むろん、その女は人間ではなかった。おれはそのときその女が恐ろしかった。恐ろしかったが、しかし、色は抜けるほど白い女だったよ。じっさいおれは、あのとき夢を見たのか、それとも雪女を見たのか、いまだにはっきりわからないね。この二つが巳之吉が初めて雪女に会った時、「恐ろしい」が九十パーセントで、「美しい」が十パーセントと云った場面です。

私は「雪女」を読んで、雪女がどういう人なのかわかりました。雪女は子ども好きで、本当は優しいということがわかりました。優しいとわかった場面は、雪女が巳之吉の顔にじっと見入っていたが、やがてにつこりと笑ったところです。そして、そのあとに『わたしは、おまえも、こっちの人のような目に会わせてやろうと思っただけで、でも、なんだか、かわいそうになってきた。おまえは、まだ年がいかないものね。巳之吉、おまえはかわいい子だね。もう、わるさはしないよ。……。』。私はこの言葉で雪女が優しいとわかりました。

改めて、「雪女」を読み、ただ怖いイメージだけだったのが、こんなにも子どもに優しく、雪女だけでも母親であるということを知り、雪女を誤解していました。知っているようで知らない昔話がいくつもあります。それを読み、自分の知識を高め、なおかつ、どんな意味があるのか理解できるように読みたいです。

「雪女」という本を読むにあたって幼いかなと思えますが、大きくなって読む昔話は何かしら感じるものがあると思いました。

高校生の部

最優秀賞

八雲のさくら

焼津高等学校 二年 原川 愛 未

私は昨年、小泉八雲の本を買った。小さいころから昔話、特に日本の妖怪やお化けなどの怖い話が好きだったので、八雲の本の中でも『怪談』という本を買った。八雲といえば「耳なし芳一のはなし」「ろくろ首」「雪おんな」などのとても怖い話で有名だ。

私は、この本を読んでいく中で、ある疑問が生まれてきた。それは「乳母うぼざくら」「十六じゅうろくざくら」という話を読んだときに生まれた。この二つの話は、読んでいてまったく言ってもいいほど怖くない話だったのだ。怖いどころか、ただのと言ったらおかしいが、ただの「いいお話」だったのだ。なぜ八雲はこの二つを怪談話に入れたのだろうか。疑問に思った私は、まず「怪談」という言葉を辞書で調べてみた。そこにはこう書かれていた。「化けものや幽霊などに関する恐ろしい不思議な話。四谷怪談など」。これを読んで、ますます疑問が深まった。

また、「乳母ざくら」「十六ざくら」には、不思議と話の内容に多くの共通点があった。その中でも私が特に気になった点が三つある。

一つ目は、「十六日」にさくらが咲くところである。「乳母ざくら」は二月十六日、「十六ざくら」は正月（二月）十六日にさくらが咲くこととなっている。なぜ、八雲は十六日にさくらが咲くということにこだわったのだろうか。八雲の歴史について調べてみたが、これといって十六日という日付

に思い入れのあるような出来事が見当たらず、さらに疑問が深まった。

二つ目は、どちらも「さくら」がキーワードになっているところだ。なぜここまで「さくら」にこだわったのだろうか。八雲の生活を調べてみると、八雲は日本の神社や寺院を駆け巡り、そこに咲き誇る美しいさくらの景観に魅了され、強く感銘を受けたと記されていた。また、八雲は自宅の庭のさくらをこよなく可愛がっていたとも記されている。八雲は、はかなくも美しいさくらに魅了され、恋をした。そして、「さくら」に対しての思いが、八雲の筆を自然と走らせたのではないだろうかと思は考えた。そして、三つ目に気になったことは、二つの話の内容が似ているところである。話の内容をまとめると、「年老いた人が、自らの命と引き換えに他の命を救う。そして、見返りとして、毎年十六日にさくらが美しく咲く」というものである。なぜ、八雲はこのように共通点の多い話を書いたのだろうか。『怪談』に載せる話なら、さくらを題材にしたもつと怖い話がよかったのではないかと思ってしまう。

昔の人が残した言葉に「花は桜木、人は武士」というものがある。この言葉は、ばつと花を咲かせた後、散っていくさくらのはかなく潔いさまという、いわゆる武士道精神を表しているのではないだろうか。小泉八雲は、本名を「ラフカディオ・ハーン」といい、要するに外国人である。このことから、私はい一つの考えにたどり着いた。八雲は、故郷にはない日本人の心・文化に感銘を受け、それを書かずにはいられなかったのではないだろうかというものだ。

結果として、怖くない話といえる「乳母ざくら」と「十六ざくら」を、八雲はなぜ『怪談』という本に載せたのかは、はっきりとはわからなかった。しかし、私はこの疑問について考え、調べていく中で、八雲の心に、少しだけだが近づくことができたような気がする。それは、八雲の心の、ほんの上澄みだけかもしれない。でも少し、私の心の中のものもやしたものも晴れたように思う。八雲は、美しく妖しいさくらに惑わされ、魅了されて、この二つの話を、日本人の心の表れと言えるような不思議な話と

して『怪談』に載せたのではないだろうかとも思うようになった。八雲の思想・心情は、まだまだ私の知り得ないほど深く、八雲の愛したさくらのように美しいものなのだと思は感じた。

「雪おんな」を読んで

藤枝順心高等学校 三年 小野里奈

人には、約束を生涯守りきることができない人の方が多いと思います。誰でも心の中には、物事への反発心があります。理性が働いて言っていない、やっていないというだけであって、全ての人の心の中にあるものです。もちろん、私の心の中にも存在しています。

巳之吉の場合、他の人にしゃべってはいけないことを、妻にしゃべってしまいました。長い間守ってきた約束を、妻の色の白さに雪おんなを重ねてしまい、その時の記憶を鮮明に思い出してしゃべってしまったのでしよう。しゃべってはいけないという理性よりもそのことへの反発心が勝ってしまったからだと私は思います。

しかし、巳之吉は反発しようと思っていなかったわけではありません。無意識のうちにしゃべってしまったのでしよう。しっかり考えれば言っていないことと悪いことの判断がつくのに、言ってしまった後だったということは私にも経験があります。人には感情があります。その感情をコントロールできないほど、感情に走ってしまうと、理性を失ってしまいます。多くの人が、言ってしまった後や、やってしまった後に後悔していると思います。「後悔先に立たず」ということわざがあるように、終わった後に悔いても、とりかえしがつきません。巳之吉も妻が自分の正体を言い、消えてしまった後、とても後悔したと思います。

そして、人は後悔することで学習し、同じことを繰り返さないように反省をしていきます。その努力が、心の成長となり、人間性に磨きがかかっていくのだと思います。

さらに、約束を破ったことに対しての報いは必ず受けることになると思います。巳之吉は、妻と二度と会えなくなりました。社会人として会社で働けば、約束を破ったとき、その人の信用は失われます。再び信用を得るために長い年月をかけ、苦労しなければいけません。約束というのは、人と人の間に生まれるものだからこそ、守っていかなければいけないものだと思います。一度は破ったことのある約束を、次は守ろうと思う人は、人として成長できると思います。相手との約束だからこそ、相手を思いやれることにもつながっていくと思います。

ところで、なぜ小屋で、雪おんなは巳之吉を殺さなかったのでしょうか。そして、なぜ人に化けてまで巳之吉に会いに来たのでしょうか。

私は雪おんなが巳之吉に恋心を抱いてしまったからだと思います。だから、一目見ただけで殺すのを止めてしまい、再び、会いに行ってしまったと思います。他に、巳之吉のそばで雪おんなのことを、他の人にしゃべらないか見張りに来たという意見もあると思います。

また、巳之吉を愛していなくても、子供は愛していたと思います。だから、正体を明かしても殺さず、子供を巳之吉に育てるように言ったのだと思います。

どちらにしても、私には雪おんなには愛情があり、家族のことを大切にしていたのだと思いました。十人いる子供を一人もつれていかなかったのは、雪おんなが自分のことを忘れないでほしかったからと、巳之吉なら子供をしっかりと育てられると思ったからだと思います。

あなたが雪おんなの立場だったら、約束どおり殺してしまいますか。それとも子供のことを考えますか。私は、自分が選んだ行動に胸を張って生きていきたいです。自分の人生に後悔しないように、たく

さん悩み、迷ってもよいと思います。自分の判断に誇りを持てる女性になりたいと思いました。

「雪おんな」だけではなく、「鶴の恩返し」も同じだと思います。見てはいけなさとわかっている反面、見たいと思ってしまう。人は、ダメと言われたことに対してやりたいと思ってしまう。矛盾しているとわかっている自分の気持ちと、どう向き合うかで次の行動が決まります。

この作品を読んで、人の心の弱さが見えました。約束を守ることと、破ることの重さを考えてみると、相手のこともしっかりと考えないといけないことがわかりました。小さい頃から誰もがやる「約束拳万」は、破ったらげんこつを一万回するぞという意味だそうです。実際にするわけではありませんが、破ったらそのくらいの報いを受けると思えば、破ることはまずないでしょう。

そして、親になった時、どういう行動をするか、何を優先するかによって変わると思いました。自分ではなく子供を優先した雪おんなのように、相手を優先して考えられる自分になりたいと思います。

奨励賞

『小泉八雲集』を読んで

藤枝順心高等学校 三年 加藤 愛理

私は、静岡県焼津市出身です。十七年間ずっと焼津に住んでいます。だから、小泉八雲のことは小学生の頃から総合の授業などどのような人なのか調べていました。しかし、実際に小泉八雲の作品を読んだのは、高校受験が終了した、高校入学前の春休みでした。高校から春休みの宿題が出ていて、その内容が、国語、数学、英語のテキストと一冊の本を読むことでした。その本が『小泉八雲集』です。今まで何度も耳にしてきた小泉八雲。中学の頃に母と、小泉八雲記念館へ行ったこともあり。しかし、実際に作品を読んだことはありませんでした。実際に読んでみると、「こういう作品を書く人だったのか」と漠然と思いました。また、その時は宿題だから一冊読まないなど思いながら読んでいたので、あまり頭に入らなかったのですが、高校二年生の夏休みに、また小泉八雲の「ゆき女」が読みたくなり読みました。その時は小泉八雲についてもっと知りたいという気持ちがあったのでいろいろインターネットなどで調べたり、もう一度小泉八雲記念館へ足を運んだりしました。そして今年も、もっと違う何かを感じる事が出来ればと思いい、また『小泉八雲集』を一冊読んでみました。初め読んだときは違う発見がたくさん出来たように思います。

私が、この『小泉八雲集』を読んで思ったことは、どの作品にも共通して、絆が描かれているということです。「ゆき女」には、ゆき女と主人公との夫婦としての絆、子供を思いやる心が表現されている

と思いました。どの作品にも同様に、怖いけれどもしつかりと読むと、思いやりや、絆を感じられる作品が多いと思いました。

小泉八雲は、本名「ラフカディオ・ハーン」という、ギリシア生まれの外国人です。私は初めて小泉八雲という名前を聞いた時、小さい頃から誰でも知っているような日本の怪談話を作る人だから当然日本人だと思っていました。外国の方と聞いた時はとても驚いた記憶があります。

なぜ、そんなに日本人の心をつかむ作品を作ることができるのか、今でも私には不思議でありませんが、きっとそれは小泉八雲自身が日本という国、国民性、土地を好きでいたからだだと思います。日本という国を知らなければこのような作品たちは出来なかつたと思います。日本人以上に日本のことを理解していたのではないのでしょうか。私は生まれも育ちも日本ですが、小泉八雲ほど日本を理解できていないと思います。やはり外国から日本に移り住み、日本人をよく観察したのだろうと思います。ある場面において日本人はどういう行動をするか、日本人ならどう考えるかというのをよく観察し、理解していたのではないのでしょうか。だから私たちは小泉八雲の作品を読んだ時に、どこかを射ぬかれたように、どきつとすることがあるのではないのでしょうか。主人公がとつた行動に自分を重ね、自分でもそうしただろうという気持ちになるのではないのでしょうか。私はそうだと思います。読み手のことを理解した作品だと思います。でも、どきつとする怖さの中にあるあたたかさが、小泉八雲の作品の特徴ではないかと思えます。家族の絆、恋人の絆、子供への思いやり、誰もが理解できる思いやりが小泉八雲の作品にはあふれています。「ゆき女」などは小さい頃から幼稚園の先生、両親などから聞いていたのでよく知っている話だったのですが、当時はとても怖いという認識しかありませんでした。しかし、それから十年以上経った今、改めて読んでみると、また見方が変わり思いやりを発見し、感動できる話だと思いました。

小泉八雲の作品は、小さい子供から大人まで楽しめる作品だと思えます。小さい頃に読み、大人になつてからまた読み直してもいい作品です。読むたびに何か一つ発見があるように思います。私はまだまだ小泉八雲のことをよく知りません。もっと小泉八雲について調べて、他県に行った時などに、「私の町は小泉八雲がいた町だよ。」と教えてあげたいです。そして、この『小泉八雲集』だけでなく、他の小泉八雲の本も読みたいです。

一般の部

最優秀賞

浦島違い — 『万葉集』と「夏の日の夢」 —

埼玉県越谷市 森 とし子

偶然、『万葉集』の浦島を詠った長歌を読んで感動し、「夏の日の夢」をもう一度読んでみた。浦島の話があつたが、よく理解できなかったからである。

なるほど、八雲もちゃんと万葉の浦島が、最も感銘深いと言っている。それにしても、本作品中で彼が語る浦島物語の乙姫は、めそめそと別れを嘆き悲しみ、未練がましい。私の記憶では、乙姫は泰然として土産に玉手箱をくれたのではなかったか。

何か釈然としないままに読み進むと、『日本書紀』にも載っていると書いてある。そんなに古い話なのかと起源を調べてみると、古いばかりか、以後の変遷は驚くべきもので、研究書も数々あり、己が不明を大いに恥じた。

伝説は古代漁労民の間から生まれたという。海の彼方に楽園を求める夢想は、厳しい現実の慰めや憧れだったろう。奈良時代、『日本書紀』に瑞江みずのえの浦島うらしま子が亀の化身の女を妻にして蓬萊山へ行ったという内容の記載がされた。『丹後国風土記』には島子と亀比売が仙境で暮らした後、島子は開けてはいけない玉匣を開けて老人になってしまふことが記された。『万葉集』では、二人の出会いと別れ、さらに島子の死が詠われる。

その後も語り継がれて室町時代『お伽草子』に至り、浦島子は浦島太郎となる。放生報恩思想が加わ

り、浦島が釣った亀を放してやると、亀の化身の姫が竜宮城へ招く話になる。無時間の世界・四方四季の庭が描かれる。「玉手箱」という言葉が使われ、浦島は老人から鶴に、最後は姫と共に鶴亀の夫婦の明神となる。

このように、不老不死の世界、亀の姫と人間の男の恋と別れの物語であったが、江戸時代以後、明神信仰や仏教的な面、恋とロマンは失われてパロディー化していったという。

明治時代、巖谷小波は昔話の集大成である全二十四巻の『日本昔噺』を著し、浦島はその中の一編であった。ここで浦島は子供たちにいじめられている亀を助け、お札に竜宮へ連れて行ってもらう話になる。亀と乙姫は別ものとされた。明治四十三年、国定教科書に載ってさらに変わる。文献にある尋常小学校読本を見ると、巖谷版の落語の語り口のような文章から敬体になったが、四方四季の庭はカットされ無時間の世界は消えた。ここに「昔々浦島は、助けた亀に連れられて……」という唱歌と共に日本中に知られた浦島が誕生したのである。

これで私は全てに納得がいった。まず、乙姫の描かれ方の違い。八雲の乙姫は泣いて悲しむが、教科書型は淡々としているわけ。次に、八雲がこの物語を大層好きだったわけ。私にはそれほど魅力的な物語とは思えず不思議でならなかったが、そもそも読んだ物語が違うのだ。八雲は古典の浦島——不老不死と恋への憧れ、叶わぬ夢とロマンの物語を、私は国定教科書型の味気ない物語を読んでいたのである。

古典の浦島、特に万葉の浦島は、神の娘にも臆せず求愛して契りを結ぶ、熱い心の持ち主である。人間界に戻ってきた後、世の変わりように驚き戸惑い、つい、わずかに玉櫛笥を開けてしまう。すると白雲が立ちのぼり、常世辺に流れ去る。あわてふためき追いかける浦島。絶望の極みに倒れ臥す間もあらばこそ、たちまち老いて死んでしまうのである。

この、人間浦島を詠う万葉の鮮やかさ、リズムの良さ。八雲が魅せられるのも尤もだ。彼は全文暗記しており、節を付けてよく口ずさんでいたという。

鋭い耳を持ち、わらべ歌や門付け女の俗謡にまで耳を傾けた八雲であれば、万葉の調べにのせた浦島にどれほど魅了されたことだろう。

平成の今、子供の絵本の現状はどうかと関心が湧き、図書館を覗いてみた。『お伽草子』などを踏まえて皆それぞれに工夫を凝らしている。浦島と乙姫の愛、四季の庭を復活させ、死後、浦島は鶴になって飛び立つことを描いたものもある。ロマンは復活したようだ。

これなら現代の子供たちは、いきなり老人にされてしまつて浦島はその後どうしただろうと、幼心に心配しなくて済む。また、この世では時間は止められないという主題について考えさせることになるのではないか。

古典は永遠に残る。かたや明治という時代は遠く、国定教科書の影響を受けた昭和も遠ざかりつつある。今、新しい多様な浦島が作られているのではないだろうか。

浦島伝説の起源と変遷を知って、ようやく私は八雲と同じ目線で浦島を味わうことができた。今後、本編にもじっくり向き合えると思う。それにしても、その契機となったのが『万葉集』と「夏の日の夢」であったことは、八雲ファンとして嬉しい限りである。

神が在す郷おわ さと

静岡県焼津市 川合 信行

図書館の帰り、久方ぶりに文化センター二階の「焼津市歴史民俗資料館」に立ち寄ってみた。古墳時代の土器からはじまり、近代昭和初期の生活用品に至るまで、時代を追った品々が整然と展示されている。その中でひととき目をひいたのが、会場の中央に置かれた大きな竹製の籠である。優に大人が五人ほども入れるであろうその巨大な籠は、恐らくは小泉八雲が焼津を訪れた際に目にした、即ち自らの作品「焼津にて」の中に書き綴った「何かの住処か小屋と見間違うほどに大きな餌籠」に違いないと思われた。さらに、その籠の隣に展示されている八丁櫓とよばれる天当船こそが「この地方に特有な奇妙な形をした船」に相違ないなどと書きながら、ついつい見入ってしまった。

八雲は今から丁度一〇〇年ほど前、荒涼とした海が広がり、その海に育まれた正直で善良な人々が暮らす焼津の地をこよなく愛し、毎年の夏をこの小さな片田舎で過ごした。焼津の風土と人々の暮らしを綴った「焼津にて」や、「海のほとり」「漂流」「乙吉のだるま」は、こうして焼津を訪れていた折に執筆したもので、また、かの『怪談』を世に送り出したのもこの頃かと思われる。

私が小泉八雲の作品にはじめて触れたのは、かれこれ五十年以上も前のこと。今は亡き祖母が語り聞かせてくれた「耳なし芳一」「貉」「雪女」などの怪談話であった。同時に祖母はこの話の作者が、かつてこの界限にも滞在したことのある小泉八雲という文学者であることも付け加えた。というのも、祖

母の家は八雲の滞在先であった城之腰から、浜通りをわずかに南に下った鰯ヶ島にあった。こうした日本各地に伝わる民話を、独自の文学形態にまとめた小泉八雲なる人物が、実は本名をパトリック・ラフカディオ・ハーンと名乗る外国人だと知ったのは、それから何年か後のことである。鋭く前方を見据えた目と、とがって高く突き出た鼻、その下にたくわえられた白いヒゲの横顔が写し出された写真を目にしたときであった。八雲は、各地に伝わる日本固有の霊や妖怪伝説に、一方ならぬ興味を有していた。

「神さんとノーノーさんにあげてから。」昔、祖母がよく口にした言葉である。即ち「神様と仏様にお供えしてからになさい」という戒めである。朝晩の食事は勿論、頂き物の菓子や果物まで、まずは神棚、仏壇の順にお供えをし、手を合わせてからでなければ家族の誰もその一切を口にすることはできなかった。祖母は敬虔な神道信者で、無論、仏に対しても崇敬の念を忘れない人であった。毎日の教会通いを欠かさず日課とし、質素儉約を常としていた。そんな祖母に或る日こんな質問をしたことがある。「毎日遠くの教会まで、わざわざ歩いて何をお願いに行くのか。」祖母は、「お願いに行くのではない。家族みんなが無事に一日過ごせたことへのお礼に行くのだ」と答えた。一方、私の祖父はもと漁師でありながら、色白で華奢な体型であった。白髪交じりの五分刈り頭に笑顔絶やさぬ穏やかな人柄で、やはり神仏を尊崇する律儀な人であった。そんな仕事一途で寡黙な祖父のささやかな楽しみといえは、一日数本の煙草と必ず一合と決めた晩酌のみであった。また祖父は、人様のあれこれを一切口にしない人でもあった。

私は半世紀の時を経た今でも、祖父の家があった当時の、浜通り界限の様子を鮮明に記憶している。日中はどこの家も玄関が開け放たれ、いつでも誰でも自由に入りが可能な状態であった。日常の生活はといえば、向隣で醤油や砂糖の貸し借りは言うまでもなく、風呂の貰い湯、場合によっては飯をよばれることさえあった。どの家も、誰もがそれを当たり前とする、そういう風土であった。それでいて人々

は幸福感に満ち、皆、平和であった。住民が互いに信頼しあい、裏切りや搾取や暴力のないこの無防備で平和な田舎社会こそが、八雲に「焼津には神様が居る」と言わしめた所以ゆえんである。八雲は不遇な幼少期を送った生まれ故郷を離れ、数々の不条理と遭遇しながら幾つかの国をさまよった末、ついに東洋のこの小さな島国日本に安住の地を見つけた。八百万やおよろずの神を信じ、祖先を敬いながら、慎ましくも力強く生きる人々から成るこの平和な国に理想郷を見出し、この地を終の棲家すみかと決めたのである。

この春、日本は未曾有の震災と大津波に見舞われた。そのような中で、報道映像に映し出された被災者の冷静かつ穏やかな振る舞い、整然と秩序だった行動、お互いを助け合う共助の姿に世界中の人々が等しく感動を覚え、尊敬の念すら寄せた。こうした日本人の心の奥底に根付いた互助・互恵の精神、さらに忠実に受け継がれた秩序・協調・礼節を重んじる生き方にいち早く感銘を受け、この国に、そしてこの焼津の地に最初に魅せられた外国人こそが、まさに小泉八雲であったと言えるのかもしれない。

優秀賞

なんぼう

静岡県焼津市 山梨 明彦

正月の古い日本の儀式よいそれ見るなんぼう心楽しも

いかによきいかによきかな焼津辺の祭りはなんぼう面白きかな

オニヤアスフクワアウチと節分の厄の払いはなんぼう楽しも

悪い虫食べるよき蝦蟇蛙にしみじみ雨のなんぼう降るやも

ああねす おぶ しんぐす ニッポンの神の心と解すよき訳

優秀賞

昭和に生まれて思う

神奈川県横浜市 杉山 令子

人の記憶とは不思議なものだと思う。

大人になってからのことさえ、記憶が曖昧で思い出せないことがたくさんあるのに、小さかった頃のことことが妙に鮮明に残っていたりする。

私は、焼津の鯛ヶ島という所で生まれた。戦後十年ほどの漁師町は、まだまだ貧しかった。浜通りから路地を少し入った所に、私の家もあった。

小さな家が犇めき合うように建ち、風の通り道すら無いような所だった。私が僅か五才までの暮らしだったが、鯛ヶ島での情景は、はっきりと覚えている。

まだ車の往来が少ない浜通り。リヤカーが生活の中で重宝されていた時代で、ラッパを吹きながら、おじさんが豆腐やながらみを売りに来ていた。

貝のながらみは、私にとっては格好のおやつで、五円玉を握りしめて走っていったものだった。おじさんが器用に丸めた新聞紙の中に漏斗を当てると、その中に五円分のながらみを入れてくれた。それを父が楊枝などなかったから、マッチ棒を折って殻から出して食べさせてくれたものだ。

浜での暮らしは、プライバシーという言葉などとは無縁で、玄関は常に開放放しで、家の中までまる見えでも、誰もそれを気にする人などいなかった。

母が小泉八雲の話をしてくれたのも、この頃だと思う。子供心にも強烈だったから、小泉八雲の名前を忘れることはなかった。幼い私にも、何故ここに遊びに来たのか、とても不思議で仕方なかった。

学校が上がって、教科書に八雲の作品が出ていてもこの話が出ることはなかった。遠い外国からやって来た外人が、明治の焼津のどこに魅力を感じたのか、ずっと気になっていた。母自身は、もしかすると、私に話したことさえ忘れているかもしれない。

大人になって、松江に行くことができた。八雲旧居に展示されていた年表の中から、八雲が焼津を訪れていたことは確認できたが、焼津に関しての他の記述を見つけることはできなかった。

ただ、松江の街はとても美しかった。情緒あふれる城下町の風情は、明治の時代に来日した外国人の八雲にとつて、この上なく神秘的で美しい日本そのものであった筈だ。それなのに何故、八雲は松江を去ってしまったのだろう。松江の厳しい寒さ、それだけが理由だったのだろうか。

私には、焼津という漁師町は、松江と比較すると全く逆に思われて、私の長い間の疑問は、増々大き

くなっていた。

私にとつて焼津は、生まれ故郷ではあるが、ふるさととも違う気がして、ましてや八雲のような外人が、幾度にも渡って訪れる程の町とは思えなかった。ふるさとを誇れる人が羨ましいと思った。焼津を「ふるさと」と熱く語れる郷土愛も持たない私は、焼津にはほとんど無関心できた気がする。八雲への疑問も日々の生活の中で、棚上げ状態になっていた。

そして、今年三月東北で未曾有の大震災が起こった。今も年老いた両親が暮らしている焼津のことが気に掛かった。子育ても一段落し、私自身も年をとり、今頃になって里心がついたのだろうか。

小さかった頃の決して豊かとは言えないけれども、楽しかった思い出が一杯の鯛ヶ島での暮らしを思い出していた。

そんな中で初めて、焼津に小泉八雲の記念館があることを知った。長い間待っていた答が、そこにあった。

八雲は五十四歳で亡くなったが、私はこの夏その年を越えた。

八雲が訪れた明治の焼津、私が過ごした昭和のどまん中の焼津。時代の隔たりはあっても、漁師町の人々が織り成す日常がそこにあったと思うのである。

小泉八雲という日本名で生きていこうと決めたヘルンの胸に去来したものは、何だったのだろうか。八雲として生きながらも、心はなお徘徊続け、自分の居場所を探し求め続けていたのではないだろうか。

そして、長い旅路の果てに、八雲は焼津にそれを見つけたのではないだろうか。人なつこくて、お節介なくらい世話焼きな人達に触れ、活気ある浜での暮らしの中に、八雲は日本を見つけたと思うのは、言いきらうか。

小泉八雲が亡くなって百年。八雲の魂は、今何処にあるのだろうか。

奨励賞

命の恋歌

千葉県流山市 葛岡 昭男

交流を描き助けた一匹の草ひばりの音は八雲を癒す

未知のもの素焼きの瓶に孵化させて調べひとふし虫の恋歌

飢えながら己の使命果たしたる草ひばりの死八雲悲しき

良縁を映す二人の晴れ姿出雲の里の鏡の池に

路地裏で庶民と語るその温さハーン先生の見えぬ左眼

奨励賞

時 空

静岡県藤枝市 山川 愛子

お母さん、貴女は今、何処におられるのでしょうか。私も齢五十を越えました。貴女がご健在なら八十近くにおなりのはず。もしや懐かしいレフカダ島の浜におられるのでしょうか。が、もし、疾とちにこの世を離れ、我が信ずるところの精霊におなりならば、ぜひこの浜に出で来られ、共に語り合ってください。私は今、万感の思いを込めて、ここ焼津、駿河の海にて空を仰いで浮かんでいます。この荒波が、この海原が気に入っています。青き空、藍色の海、容赦なく深い海底。空を見上げ、ポツカリ浮かんだ、異邦人の我が姿を見て沿岸で「異人泳ぎ」だと笑いながらも気にかけてくれる、乙吉殿をはじめとする浜の人々。

思えば長い長い旅路でした。ラフカディオ……「彷徨う」の意をもって命名された私は、実にその名の通りの人生でした。

お母さん、私には解るんです。もう僅かな時間しかないことが。心臓の鼓動がとみに尋常ではなくなっているのです。このままこの大海原で息が絶えるやもしれない。が、そうだとでも本望です。ここでこうしてポツカリ浮かんでいると、何故か、とても落ち着きます。レフカダの海にいるような、はたまた貴女の胎内にいるような気がします。

アイルランドの浜辺で、ロンドンの場末で、アメリカの貧民街で、左眼失明、極貧、空腹、失望、蔑

み、裏切り、対立等々、いろんなことにわくわくしました。辛くなかったといえは嘘になりますが、いつの間にか乗り越えており、それらの経験は糧となり、後年多数の作品の中で実を結んでくれました。しかし、今回ばかりはそうはいかないようです。この心臓に、時折、押し寄せてくる動悸は、治りそうにありません。私は、死ぬことは怖くはないのです。輪廻の思想と科学的生命論を知ったからです。我が命を繋ぐ子どもたちもいるからです。そして、旅路の終着地に焼津の人々がいてくれたからです。私は、ここで心から笑うことが出来ました。実に愉快なことでした。

まだまだやりたいことが沢山あります。この国の民衆の持つ限りなく優れた文化を掘り起こし、欧米に伝えたい。でも、時が来てしまったようです。苦闘しつつも充実した人生でした。さあ、このあとは天空を彷徨いながら、人々の暮らしを見届けに行きましょうかな。お母さん、貴女とともに。

貴方は、どうやってこれほどの仕事を一人でやり遂げられたのでしょうか。この母は、異国アイランドから石も追われるが如く、放心のまま出てきてしまいました。あの別れ際に四歳だった貴方の哀しみに満ちた瞳を終世忘れたことはありません。かの地の富豪の家庭で育てられれば、それも貴方の幸せだと自分に言い聞かせて歳月を積んできました。

養家の没落、放浪の旅、苦難の生活、さらに少年期での左眼の失明、視力の低い右眼のみで、いかにして学問を積んだのでしょうか。移民したアメリカで、貴方は、どんな思いをしながら苦難の日々を乗り越えていったのでしょうか。想像しただけでも涙が溢れます。

勇気とペンだけを鞆に詰めて、貴方は洋洋と新天地へ赴いていきました。貴方は、アラン・ポーやウォルト・ディズニー、ファールブル、シヨパン、ゴーギャン、はたまた日本という国の太安万侶、牧野富太郎氏がやり遂げたような仕事を次々に果していきました。またジャーナリストとして、アメリカ、欧

州、日本でも高く評価され、社会的地位を築きました。多くの方が、貴方の努力を称賛し信頼を寄せてくれたことでしょう。でも、母には解ります。これら全ての作品は、貴方の極限を越えた孤独の結晶であることが。

願っても、願っても決して実現することのなかった母との再会。悲しみを少しでも忘れるために独学に没頭したのではないですか。

恨んでも、恨んでも恨みきれない父母、血族。その恨みを、怒りを困難克服の力にしていったのではないですか。

やがて日本という国に根を下ろすも、貴方の情熱と探求心は休むことはありませんでした。命を全うするまでの僅か十四年の間にも多くの作品を手掛けました。西欧諸国と比して、必ずしも裕福とはいえないこの国。自然が課す地震、津波、洪水の苦難を宿命と受け止め黙々と耐え復興をやりとげる国民。そこに心を寄せ、土着した暖かなペンで、民の暮らしぶりを世界に発信しました。言い伝えを文学に昇華し、ジャーナリストとして警鐘と声援を記しました。

貴方が、この国で暖かな家庭を営めたことを知り安堵しました。また心底笑い合える純朴な人々のいる町に辿り着けたことを知り感無量です。

「漂流」を読んで

静岡県焼津市 八木 ふさ子

物語は、讃岐へ向かう途中紀州沖で、船が転覆・遭難し、乗組員九人中唯一人、奇跡的に生還した甚助老人の体験談を題材にして短編に仕上げられている。

話を聞いた八雲が——「何ぼう良き話」——と言ってダンスの足取りで、部屋をグルグル回り、喜んだ。——と長男一雄著『父「八雲」を憶う』で読んだが、日本人への関心が高く、海を愛し、「海には靈魂が宿る」とした八雲の思想から、絶好の素材になったのではないかと思う。

西洋文明と個人主義を嫌った八雲が、日本に来て、当時の日本人の心情——純粹・正直・律儀で礼儀正しい氣質——や、お互いを思い、助け合う仲間意識に心動かされたり、漂流中暗闇の中に光を見、身体が弱りきった時、死んだ仲間四人の亡霊が叱責し、転覆時、「板子を渡す」と声を掛けられた勘吉は「阿弥陀尊像に『なむあみだぶつ』を念ずるよう」と教えられる。また眠気に襲われた時、カツオのえぼしが腰や股を刺し、浜べの鳥が頭を突いたり等々、甚助の語る「幻視・臨死」の実体験は、「幻覚」「光」の作家ハーンに取って創作意欲をかきたてられるものだったに違いない。

漂流中、仏の姿を思い浮かべ「なむあみだぶつ」を一心不乱に唱えていた甚助は、世話になった船長から「板子は金比羅さまへ奉納」という話があった時、礼を述べた上で「重ねてお願いした焼津の小川のお地藏さまへ」と答え、海蔵寺へ奉納する。甚助や漁村焼津の人々の地藏尊信仰が伺える。

私の子供の頃は、船が出航したり、遭難などの報せがあると、家族・親類縁者・隣組の人々が無事を祈り、「信心詣り」と称してあちこちの神社や寺にお参りしたものだ。物語の終りで「難船して助かった者がお礼まいりする金比羅さまへは毎年、小川のお地藏さまへはちよくちよくおまいりする」と甚助が語っているが、八雲は神仏を上手に使い分け柔軟に対応する日本人の信仰姿勢の中にキリスト教とは異種のものを感じ、生活の中に根づいている民間信仰に一層の興味を抱いたのではないだろうか。

甚助の、漂流と地藏尊信仰の証である板子は今、奉納した海蔵寺から移管され、「小泉八雲記念館」に展示されている。

海蔵寺のご詠歌

たぐいなや あらいそなみに よるよると

ひかりをさして うかむぼさつわ

を見た時、板子一枚を頼りに死の恐怖にさらされた甚助は、念仏と共に光（救助）を求めご詠歌も唱えていたに違いない。船乗りとしての智恵と判断もさることながら、甚助の幸運は、ひたむきな地藏尊への祈りに依るものと思えて仕方ない。

「漂流」は台風が来つつあった防波堤の上に座って、甚助老人から遭難時の模様を聞くという設定で始まるが、淡々と語る昔話が、甚助の話す言葉そのまま、それが随所に効果的に用いられて読む者の興感を呼びさします。色彩・音の描写がリアルで、時にテンポが良く、リズム感が心地良いと思う。

奨励賞

八雲と四季

静岡県焼津市

早川 博子

笑みお福八雲ビックリどんど焼き

雛祭賑閉じれば母の顔

西瓜市抱いて叩くやおセツさん

曼珠沙華浪除地藏に供えおり

湯豆腐の湯気の向うに故郷が

入選以外の応募作品一覧

小学生の部

題名	氏名	学校・学年	題名	氏名	学校・学年
1 「雪女」を読んで 中兵えさんは男前	菅原 彩	豊田小5年	19 小泉八雲と焼津	山梨尚哉	港小4年
2 『小泉八雲のこわい話 食人鬼』 前略、八雲さんへ	山中 駿	豊田小3年	20 小泉八雲と焼津	松浦 翼	港小4年
3 小泉八雲を読んで	宮本 萌	豊田小5年	21 山口乙吉さん	八木皓平	港小6年
4 「耳なし芳一」を読んで	向坂友里	小川小6年	22 小泉八雲	池ヶ谷舞	港小6年
5 「水あめを買う女」を読んで	小野田菜央	焼津南小5年	23 私だけの人生	山梨晴香	港小6年
6 「耳なし芳一」を読んで	鈴木海都	焼津南小6年	24 小泉八雲さん	佐々木真優	港小6年
7 「耳なし芳一」を読んで	長谷川左近	焼津西小3年	25 八雲の焼津	小池亜優	港小4年
8 「水あめを買う女」を読んで	若山拓真	焼津西小3年	26 小泉八雲って どんな人	武藤 悠	港小4年
9 ふしぎな雪女	薬科映都希	焼津西小3年	27 よくばり	菜種萌加	豊田小5年
10 嵐の海のゆうれいを聞いて	天野裕太	焼津西小5年	28 『小泉八雲こわい話』を読んで	小野田陽菜	黒石小4年
11 亡霊を読んで	若山麻希	焼津西小5年	29 こいずみやくもさんへ	永井公健	黒石小2年
12 『津波！命を救った稲むらの火』 勇気を出して津波を知らせた五兵衛さん	秋山なるみ	港小4年	30 小泉八雲短歌	西川乃愛	黒石小4年
13 八雲の足跡	青島令奈	港小4年	31 「雪女」を読んで	岩崎百花	和田小2年
14 稲むらの火を読んで	見崎 光	港小4年	32 「雪女」を読んで	石川貴裕	和田小2年
15 八雲さんへ	大櫛 望	港小4年	33 「雪女」を読んで	増田千愛	和田小2年
16 八雲の焼津	中島快斗	港小4年	34 「雪女」を読んで	三輪拓飛	和田小2年
17 八雲さんへ	吉田敦貴	港小4年	35 「雪女」	ドラリスギタ	和田小2年
18 八雲さんへ	村松秀真	港小4年	36 「雪女」を読んで	杉山実乃梨	和田小2年

小学生の部

題名	氏名	学校・学年	題名	氏名	学校・学年
「雪女」を読んで	和泉星朱	和田小2年	「雪女」を読んで	菊田衣麻	和田小2年
「雪女」を読んで	内堀 翼	和田小2年	「雪女」を読んで	良知蒼大	和田小2年
「雪女」を読んで	正木陸都	和田小2年	「雪女」を読んで	長野未紗綺	和田小2年
「雪女」を読んで	鈴木りのあ	和田小2年	「雪女」を読んで	中野結音	和田小2年
「雪女」を読んで	村松佳奈	和田小2年	「雪女」を読んで	濱地勇汰	和田小2年
「雪女」を読んで	増田菜花	和田小2年	「雪女」を読んで	村松孝則	和田小2年
「雪女」を読んで	曳馬望空	和田小2年	「雪女」を読んで	山田息吹	和田小2年
「雪女」を読んで	矢山照英	和田小2年	「ちんちんこぼかま」には負けないぞ!	藪崎和士	藤枝小3年

中学生の部

題名	氏名	学校・学年	題名	氏名	学校・学年
「耳なし芳一」を読んで	大橋芙夕	豊田中1年	小泉八雲の『怪談』を読んで	松浦若菜	金谷中2年
「雪女」をよんで	杉本 楓	金谷中1年			

高校生の部

題名	氏名	学校・学年	題名	氏名	学校・学年
「ろくろ首」について	望月香那	藤枝順心高3年	小泉八雲集「雪おんな」	木野文菜	藤枝順心高3年

一般の部

題名	氏名	住所	題名	氏名	住所
八雲	八木宏之	静岡県焼津市	母の祈り	荒井教子	静岡県焼津市
ストローサンダル	袴田 隼子	静岡県焼津市	陽ざしの町	斉藤さくや	静岡県焼津市
「八雲への手紙」に寄せて	福谷 正子	大阪府高槻市	愛した焼津	勝又女韻	静岡県静岡市
「稲むらの火」の真実	佐藤吉男	静岡県静岡市	八雲に想うふるさと焼津	宮島克実	静岡県焼津市
超カンパリ屋 帰化した小泉八雲	鰐木捷彦	新潟県小千谷市	月と海と夜光虫と―八雲の挽歌	油井喜夫	静岡県焼津市
八雲さんへ	佐久間 信	高知県高知市	今、八雲を想うこと	巻田幹彦	静岡県焼津市
文化センターにて	桜井 仁	静岡県静岡市	八雲とおもいで	桜井陽子	静岡県藤枝市
八雲	森 三歩	静岡県浜松市	津波	住吉睦子	静岡県焼津市
八雲思ひて	小池 正利	静岡県焼津市	拝啓、(ハーン)八雲様	石谷英雄	静岡県静岡市
八雲忌	村松兼二	静岡県焼津市			

審査を終えて

審査員長 大澤 隆 幸

小泉八雲記念館職員の方々のお骨折りの結果、第二十一回（平成二十三年度）の応募作品の取りまとめが十月下旬に終わりました。引き続き、各審査員がほぼ一か月の間、審査対象のみなさまの作品と取り組みました。十二月に最終審査を行い、ようやく、このような結果を出すことになりました。

今年度は昨年度を下回ってしまいました。百二点の応募がありました。小学生の部は六十一作品、中学生の部は九作品、高校生の部は五作品、一般の部は二十七作品でした。市内の小学生の応募がこのコンクールを支えているようです。小学生のみなさんが百年以上前に焼津にきて焼津を観察し記録し、世界に発信してくれた八雲を読み、触れ合って、今後も積極的に参加してくれることを期待しています。

このコンクールに参加するには、小泉八雲の業績を見つめ、そのことよって昔の焼津、現在の焼津を考え、さらには私たちの生活を考え直すことを文章化することから始まります。普段、あまり読書することがない人、文章をつづることがない人でも、こういう機会に原稿用紙に向かい、自分の思いをまとめてみることは意味のあることではないでしょうか。毎日の多忙な暮らしから一歩はなれて、自分を、自分の過去、郷土の過去を振り返ることは、明日に向かって生きるために今後ますます必要な立ち止まりとして評価できると思います。各部門の担当者の講評を紹介します。

小学生の部

今年、三月十一日に起きた、東日本大震災と「稲むらの火」、そして、焼津を結びつけ、自分の体験や、

津波に対する考えを表現したものが多く見られました。

また、怪談に対する感想文では、「こわい」という思いでひとくくりにするのではなく、八雲の人性や登場人物の心の動きを深く読みとっているものがみられて、良かったです。

最優秀作品『「雪女」と「人魚姫」―比較して考えたこと―』は、一昨年応募した「雪女」について、再考したものです。以前にも「人魚姫」と似ているところについてはふれられていましたが、今回は四つの類似点について、独特の切り口で語り、作品論風にまとめられています。

書かれた時代を調べたり、資料を元に考えたりと、事実を元に独自の考えを組み立てて、結論に結びつけており、大変興味深く読み応えがありました。

他の選ばれた作品においても、自分を重ねて考えたり、体験したことから主人公の心情に思いを馳せたりして八雲作品を自分に近づけて考えることができていたと思います。

中学生の部

毎年審査をしながら、中学生の応募作品が少ないことを大変残念に思っています。中学生が八雲の代表的な怪談である「雪おんな」や「耳なし芳一」などを読んで登場人物たちの深い心理や作品のテーマを追求し、それをまとめることはかなり難しいことだと痛感しています。

そんな中でも、今回新しい八雲の作品に挑戦したり、八雲と焼津とのかかわりを通して発見したことなどをまとめた力作に出会えたことをうれしく思います。

感想文にこだわらず、随想や韻文（俳句・短歌・詩）で応募してみても良いでしょう。新しい作品や視点、スタイルに挑んでみてくれることを期待しています。

今回の最優秀作品「つながり」は、筆者と八雲との出会いを通して焼津の海や人々を愛した八雲の人

間的な魅力を発見しました。さらに自分たちの住む焼津の魅力にも気づいています。自分と八雲とのつながりを自らの体験を通して素直に述べているすばらしい作品です。最後の手紙文も、八雲への熱いメッセージが込められていて大変効果的でした。

その他優秀賞の作品の中にも怪談の中の八雲らしい表現に着目し、ユニークな論を展開した作品や、八雲の愛した焼津の自然を守っていききたいという環境面からのアプローチがおもしろい作品などもありました。

高校生の部

最優秀賞「八雲のさくら」は、八雲の「乳母さくら」「十六さくら」の二つの作品を読んで生まれた疑問を、八雲の生涯や日本のことわざなどさまざまに考察することによって、八雲の愛した日本、日本人とは何かにまで思索を深めています。自分の視点で作品の向かい合い、豊かな発想をわきあがらせたことが、歯切れのよい文章から伝わってきます。

優秀賞『「雪おんな」を読んで』は、昔話が約束を守ることと破ることを説くのはなぜかを、人間の心理、自分の体験をふまえて個性豊かに述べています。後半で、約束を破った巳之吉を殺さなかったことについて、雪おんなの示した情をてがかりに考察を試みています。難しいテーマなので、考えをまとめるには、丹念な読みができるとうかっただと思います。

奨励賞「『小泉八雲集』を読んで」は、八雲の怪談に、絆、思いやり、愛情の大切さを説く共通性を見つけたことを、自己の八雲とのかかわりから、自己の成長の一端として捉えています。焼津に生きる人々の常に身近に八雲が生きていることがわかります。もう少し八雲作品を引用すると、説得力が生まれたでしょう。

入賞作品三作品は、それぞれ自分の思いや考えを、自由にのびのびと表現しています。その点で、自分の考えを深めていて好感がもてますが、そのように考えたきっかけや根拠をもう少し具体的に示す工夫があるとよかったです。

一般の部

最優秀賞として浦島を論じた作品「浦島違い」を選びました。これは、万葉集、風土記、御伽草子などに目配りしたうえで、「夏の日の夢」を理解しようとしたものです。現代人は浦島をどう考えたらいいかという問題提起をし、八雲の浦島をこの浦島像の変化の中に置いてみるとその独自性が読めるのではないかと、とおだやかに締めくくってまとまっています。

優秀賞として「神が在す郷」は、歴史民俗資料館で目にした、生餌を入れておく大籠から、さらに展示されてある船、そして八雲が描いた舟へと連想をつなげます（序です）。八雲作品との出会いを語り、八雲の民話志向を指摘して、そこから祖父母の信心へと話を転じます。このような一般人の心にある素朴な信仰心が現代人にもあって、大災害時のようなときに浮上しているのではないかとというのが作者の思いであると評者は読みました。

「なんぼう」は、八雲の口癖の言葉を借りたものです。字余りが気になりますが、個性的な発想の面白さに魅かれました。短い形式の中に、焼津、八雲、城之腰、乙吉と八雲関連の語句を投入するだけでは歌にはなりません。短歌、俳句の投稿者の方々は、むしろ、それらを使わない手法でも八雲を感じさせ、焼津を思わせることで腕を振るっていただきたいです。

「昭和に生まれて思う」は、焼津の海岸近くに生まれた方が、高度成長期以前を回想して、かつての

情景を想いうかべます。浜の暮らし、母親が話してくれた八雲のこと。八雲はなぜ焼津にきたのだろうか、という長年の疑問。松江を訪れてます、この疑問が深まる。作者は焼津に記念館があることに初めて気づいた（！）とは驚きですが、そこでこの疑問への答えを見つけたという思いで締めくくります。原稿用紙の使い方に難がありますが、素直に展開して読ませます。以下は奨励賞です。

「命の恋歌」は「くさひばり」という八雲の随想に材料を求めたものです。飼っていた虫が、女中がつい不注意で餌をやるのを忘れ、死なせてしまったという話です。そこからモチーフを見つけてストーリーに歌い上げました。対象を把握しようとするあまり、作者の思いが希薄な感じが残念です。

「時空」は、八雲の生涯を、母と子の対置にして両者の思いを並べたものです。子は、ロンドン、アメリカの各地や海岸を流離ったあぐく焼津にたどり着いた八雲が思いを述べます。母の方は、極貧で始まった彼の生活の苦勞を慰めながら、子の努力を讃えます。平凡でセンチメンタルですが、それでも、作者なりの理解を外連味なくまとめています。

『「漂流」を読んで』は、作品と知り合った経緯を確認し、八雲は作品のどこに魅かれたかをテキストに沿って読みます。一転、幼児期の昔に思いをはせ、日本人の信仰にたいする八雲の反応を考え、その文体を評価します。

「八雲と四季」は、素直に、素朴に、また軽く歌い上げていて、深い思いをいだかせずに、八雲の日常の一コマを想像します。

どの応募作品にも共通して言えることは、何を問題にしているのかという意識が弱いのではないかと思います。平明に自己の思いを描きつつ、これは自分が納得できないこと、自分としては違う意見を持つということ、疑問なことをまず整理して、それにしつこくこだわっていたいただきたい。解答はすぐ

に出てこなくても、問題が他の人々にも大切なことであれば、問題提起だけでも意味があることではないでしょうか。

第二十一回（平成二十三年度）小泉八雲顕彰文芸作品コンクール審査員

大澤 隆幸 静岡県立大学教授・小泉八雲顕彰会副会長

長谷川恭司 学識経験者

藤田 和枝 静岡県立大井川高等学校教諭

大畑 正次 焼津市立大井川中学校教諭

早川 恵 焼津市立焼津西小学校教諭

寺尾しのぶ 焼津市立大富小学校教諭

第二十一回（平成二十三年度）小泉八雲顕彰文芸作品コンクール要項

【趣 旨】 焼津に滞在し、焼津を愛した小泉八雲の業績を普及・顕彰するために八雲に関する作品を広く募集し、優秀な作品については表彰のうえ、作品集にまとめて発行します。

【主 催】 焼津市教育委員会

【後 援】 小泉八雲顕彰会

【募集作品】 小泉八雲を題材とした未発表作品であれば何でも構いません。

例えば、八雲作品の読書感想文、八雲への手紙や焼津小泉八雲記念館やゆかりの地をめぐるための感想などを含む随筆、八雲の研究論文、八雲を題材とした短歌・俳句・詩など。

【資 格】 小学生以上

【募集期間】 平成二十三年七月一日から平成二十三年九月三十日（当日消印有効）

【募集条件】 全部門を通じて一人一編とし、短歌・俳句は五首または五句で一編とします。

いずれも四百字詰たて書原稿用紙を使用し、五枚以内とします。ただし、研究論文については原稿用紙十枚以内とします。ワープロ原稿の場合は、A4サイズ二十字×二十行（たて書）。

【応募上の注意】

① 作品は本人の自作で未発表作品に限ります。

② 作品は楷書ではっきり書き、原稿に必ず**題名**を書いてください。
短歌・俳句も五首（句）をまとめた**題名**を書いてください。

小学生・中学生は鉛筆書きでも構いませんが、濃くはつきりと書いてください。

③ 作品には、必ず応募用紙をつけ、**題名・氏名・年齢（児童・生徒の場合は、学校名・学年も記載）、住所、電話番号**を記入してください。
また、読書感想文については、読んだ本の書名・編著者名・出版社名を記入してください。

④ 作品は、常用漢字、新かなづかいを原則としますが、短歌・俳句は旧かなづかいでも構いません。

⑤ ペンネームの使用もできますが、応募作品には本名も併記してください。

⑥ **上記要件に欠ける場合は、失格とする場合があります。**

⑦ 応募原稿は返却しませんので御承知ください。

⑧ 応募された作品についての問合せには応じません。

⑨ 入選作品の著作権は主催者に帰属します。

⑩ 入選者を含む応募者の氏名・所属・住所および作品に関する事項について、広報一般に使用・掲載されること及び報道に提供することを許諾するものとします。

【審査及び賞】

焼津市教育委員会が委嘱した審査員により小学生・中学生・高校生・一般の部別に審査を行ない、入選者には、賞状及び記念品を贈ります。応募者には、作品集と参加賞を贈ります。

【発 表】 入選者のみ、郵送で結果をお知らせします。

【表彰式】 平成二十四年二月に、焼津文化会館で実施する予定です。

【作品集】 入選作品は作品集にまとめます。作品集に掲載する際には、明らかな誤字・脱字は訂正し、句読点やかなづかいについて、加除する場合があります。作品集には応募された全ての方の氏名等を掲載させていただきます。また、入選作品は焼津小泉八雲記念館ホームページに掲載する場合があります。

【応募・問合せ先】

〒425-0071 静岡県焼津市三ヶ名1550番地

焼津小泉八雲記念館 電話054-620-0022

URL <http://www.city.yaizu.lg.jp/yaizu-yakumo/index.html>

E-Mail koizumiyakumo@city.yaizu.lg.jp

資料編

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の生涯

西暦 年号 年

一八五〇 嘉永 三 ギリシャ・レフカダ島で次男として生まれる。父チャールズ・ブッシュ・ハーン（アイルランド出身、イギリス軍医）、母ローザ・アントニア・カシマチ（ギリシャ出身）

一八五二 嘉永 五 母と共に父の故郷アイルランドに向かう。

一八五三 嘉永 六 グレナダから父チャールズがダブリンに帰還し初めて父子が対面する。

一八五四 安政 一 母ローザが実家のあるキシラ島へ帰る。弟ジェームズ・ダニエル・ハーンが生まれる。

一八五五 安政 二 大叔母サラ・ブレナンに引き取られる。ウォーターフォード州トラキア海岸の別荘へ行き水泳を覚える。

一八五七 安政 四 父母が正式に離婚する。

一八五八 安政 五 初等科教育を施される。（読み書きは得意であったが算数は苦手であった）

メイヨー州ユリブ湖畔のコングヘ度々出かけるようになる。

一八六一 文久 一 フランス、ルーアン近郊イヴトーの教会学校に入学する。

一八六三 文久 三 イギリス・セント・カスバート・カレッジに入学する。

一八六六 慶応 二 学校での遊戯中左目を失明する。父がスエズで死亡する。

一八六七 慶応 三 大叔母破産のため学校を中退する。（一時フランスの神学校へ入学したという説もあるが不明）

一八六九 明治 一 アメリカに渡る。オハイオ州シンシナティに住む。

一八七一 明治 四 大叔母ブレナン夫人の遺産が送金されず、以降、アイルランドの親戚と断絶する。

一八七二 明治 五 日刊新聞「シンシナティ・インクワイアラー」の有力な寄稿者となる。

一八七四 明治 七 シンシナティ・インクワイアラー社の正式社員となる。

一八七五 明治 八 下宿先の料理人アリシア・フォリー（愛称マティ）と結婚する。シンシナティ・コマースヤル社へ移る。

- 一八七七 明治二〇 マテイとの結婚が破綻する。ルイジアナ州ニューオーリンズに移る。
 一八七八 明治二一 アイテム社で副編集者の職を得る。
 一八七九 明治二二 食堂の経営を始めるが、二〇日で倒産する。(共同出資者の持ち逃げ)
 一八八一 明治二四 「タイムズ・デモクラット」紙の文芸部長となる。
 一八八二 明治二五 婦人記者エリザベス・ビスランドと出会う。
 一八八三 明治二六 ニューヨークの出版社「ハーパーズ・マンスリー」の仕事始める。
 一八八四 明治二七 万国産業綿花百年記念博覧会で日本政府派遣事務官服部一三と会う。
 一八八五 明治二八 『コンボ・セーブ』『クレオール料理』を出版する。
 一八八七 明治三〇 『中国怪談集』出版。ニューヨークに移る。西インド諸島マルティニーク島へ向かう。一度ニューヨークに戻り再びマルティニークへ向かい二年間滞在する。
 一八八九 明治二二 ニューヨークに戻る。『チータ』を出版する。
 一八九〇 明治二三 画家ウエルトンと共に日本に向かう。四月四日、横浜港に到着する。松江中学校の英語教師として赴任する。『仏領印度の二年間』『ユーマ』を出版する。
 一八九一 明治二四 小泉セツと生活を共にするようになる。十一月、熊本第五高等中学校に転任する。
 一八九二 明治二五 セツと共に博多・神戸・京都・奈良・隠岐・美保関を訪ねる。
 一八九三 明治二六 長男一雄が誕生する。博多・長崎を訪ねる。
 一八九四 明治二七 『龍南会雑誌』で「極東の将来」を発表する。金毘羅参りに出かける。神戸クロニクル社の論説記者として、神戸に移住する。日本の第一作『知られざる日本の面影』を出版する。
 一八九五 明治二八 神戸クロニクル社を退社する。京都を訪れる。『東の国から』を出版する。
 一八九六 明治二九 二月、帰化手続きが完了し、「小泉八雲」に改名する。美保関・松江を訪れる。『心』を出版する。
 一八九七 明治三〇 八月上京、帝国大学文科大講師に就任する。
 一八九八 明治三一 二月、次男巖が誕生する。三月西田千太郎が逝去する。八月四日初めて焼津を訪れる。(山口乙吉宅に滞在) 焼津からの帰途富士登山をする。『仏の畑の落穂』を出版する。
 『異国風物と回想』を出版する。

- 一八九九 明治三二 夏、家族と共に焼津に滞在する。『霊の日本』を出版する。三男清が誕生する。
 一九〇〇 明治三三 夏、家族と共に焼津に滞在する。『影』を出版する。
 一九〇一 明治三四 夏、家族と共に焼津に滞在する。『日本雑記』を出版する。
 一九〇二 明治三五 夏、家族と共に焼津に滞在する。『骨董』を出版する。
 一九〇三 明治三六 東京帝国大学講師退官。九月、長女寿々子が生まれる。
 一九〇四 明治三七 三月、早稲田大学文学科に出講する。『怪談』を出版する。八月上旬から一雄、巖、書生の新美と共に焼津に滞在する。九月二六日、心臓発作の為逝去。九月三〇日、東京牛込、瘤寺で葬儀。墓地は雑司ヶ谷墓地。法名「正覚院殿浄華八雲供居士」『日本―一つの解明』を出版する。
 一九〇五 明治三八 『天の河奇譚―その他』を出版する。
 一九一五 大正 四 従四位が贈られる。
 一九二一 大正一〇 山口乙吉逝去

漂流

小泉八雲 著

村松眞一 訳

(静岡大学名誉教授)

台風が近づいていた。私は砕ける大波を見ようと、強風の中で防波堤に腰を下ろしていた。傍には天野甚助老人が座っていた。東南の方は、一面に墨を流したように暗く、海だけが異様な黄褐色をしていた。とてつもない大波が、もう聳えるようにして寄せて来ている。それは、百ヤードほど先でドドツと地響きを立てて崩れ、泡を飛ばして波うち際一面を被いながら、顔まではねかかってくる。怒濤が砕ける長い響きのあと、その度に引いてゆく砂利の音は、ちょうど全速力で走る列車の轟音そっくりである。私は天野甚助に、見ていると怖くなると言った。すると彼はにやりと笑った。

「わたしはこれよりもっと荒れる海で、二日二晩泳いだです」と彼は言った。「あの時わたしは十九歳、八人乗り組んだなかで、助かったのはわたし一人です。」

「わたしどもの船は福寿丸といって、船主はこの町の前田甚五郎でした。乗り組んだ者は、一人のけると、みな焼津の者ばかり。船長は斎藤吉右衛門といって——六十歳すぎの人、城之腰に住んでいて——このすぐ後ろの通りです。もう一人老人が乗っており、仁藤正七といい、新屋に住んでいました。」

それから四十二歳の寺尾勘吉、その弟で巳之助という十六になる若者も一緒でした。寺尾の衆も新屋に住んでいました。それから三十になる斎藤平吉。それに松四郎という人。周防すおうの出で、焼津に住みついていました。鷺野乙吉というのがもう一人、城之腰に住んでいて、まだ二十一。わたしが船で一番年下——寺尾巳之助は別ですが。」

「わたしどもは申年さねの万延元年、七月十日の朝、焼津から讃岐へ向けて船を出しました。十一日の夜、紀州沖で東南から吹きつける暴風に見舞われたです。夜中少し前に船が転覆、ひっくりかえるなど思っただとき、私は板子を一枚つかみ、海へ放り出して、すぐ飛び込みました。その時は恐ろしく吹き荒れていました。夜は真つ暗で、二、三尺先しか見えません。しかし運よくあの板子を見つけ、それを抱えこむようにしました。次の瞬間、もう船は消えていました。わたしの近く、海の中にいたのは、鷺野乙吉と寺尾の兄弟と松四郎という男で、みんな泳いでいました。他の者は影も形も見えませんが、たぶん船と一緒に沈んでしまったのでしょうか。わたしら五人は、大波にもまれて漂う間、互いに呼びあっていました。それから気がつくと、寺尾勘吉だけ、ほかのみんなのように、板子か何か板材をもっていません。わたしは勘吉に向かってどなたです。『あにき、あなたには子供がある。おれはまだ若い——この板子をやる。』すると勘吉がどなり返しました。『この海じゃ板子はあぶない——木をはなせ、甚やう、——怪我するぞ!』それに答えもしないうちに、黒い山のような大波が、わたしらの上にドツとかぶさってきました。わたしは長いこと波の下にいました。それでまた浮き上がってきたときには、勘吉の姿はどこにも見えませんでした。若い者たちは、まだ泳いでいました。が左手へ押し流されていきました。お互いに大声で呼び合いました。わたしは波についていくようにつとめました。他の者たちはわたしに呼びかけます、『甚やう!甚やう!——こっちへこい——こっちへこい!』でもその方角へ行ったら、とても危ないことがわかっていました。と申しますのは、波が横からぶつかるたびに、わたしはそ

の下に引きこまれたからです。そこでわたしは呼び返してやりました。『潮について行け！流れについて行け！』けれど、連中にはわからなかったようです。それで、なおも呼んでいました。『こっちへこい！——こっちへこい！』——それから呼び声は、そのたびにだんだん遠ざかって行きました。わたしは怖くて返事ができなくなりました……溺れた者は、仲間が欲しいと、そんな風に呼びかけるものです、こっちへこい！——こっちへこい！』

「しばらくして、その呼び声は止まりました。聞こえるのは、波と風と雨の音ばかり。あたりは真つ暗で、波は去っていくその時だけ見え、それが高い黒い影となって、恐ろしい力で引っぱります。その引っぱり方で、どっちへ向かえばよいか見当をつけました。雨が碎ける波を押さえてくれました——雨が降っていないかったら、そんな荒海に、誰だつて長くは生きていられなかったでしょう。しかも刻々に風はひどくなり、波は高くなる一方です。——わたしは小川の地蔵さまに、一晩中お助けを乞いました……明りですか？——ええ、水の中に光って見えました。多くはありません。大きなのが、蠟燭のように光っていました……」

「明け方、海はきたならしく見えました——あおい泥いろです。波は小山のようで、風は恐ろしい吹きようでした。雨としぶきが水面に霧となつてけぶり、空との境は見えません。けれど、もし陸地が見えたとしても、そうして漂っているようにするしか、どうしようもなかったでしょう。わたしは腹が空いて——ひどく腹が空いてきました。やがてその苦しさは我慢できなくなりました。一日中わたしは大波にもまれ、風と雨にうたれて漂っていました。陸地は影すら見えません。わたしはどちらへ行っているのかわかりませんでした。あんな空の下では、西も東もわかつたものではありません。」

「暗くなつてから風が止まりました。しかし雨はまだひどい降りで、あたりは真つ暗です。空き腹の苦しみはなくなりました。けれど体が弱つて——すっかり弱りきつて、わたしは沈んでしまふに違いない

と思いました。そのとき、あの声がわたしを呼んでいるのが聞こえました——前夜わたしを呼んだ例の声です——『こっちへこい！——こっちへこい！』……すると不意に、福寿丸の四人の姿が見えました——泳いでいるのではなく、わたしのそばに立っているのです——寺尾勘吉と寺尾巳之助と鷺野乙吉と松四郎でした。みんな怒った顔をして、わたしを見えています。そして子供の巳之助が叱るように叫びました。『ここでおれは舵を決めにやららん。だのに、甚助、おまえは寝てばかりいて！』それから寺尾勘吉が——わたしが板子を渡そうとした男ですが——両手で掛物をもつてかみこみ、それを半分広げて申しました。『甚よう、これが阿弥陀さまの絵だ——見ろ、いまこそ念仏を唱えにゃいかん！』それは変な話し方で、何だか怖くなりました。わたしは阿弥陀さまのお姿を見ました。そして、すっかり恐ろしくなつて念仏をくりかえしました——南無阿弥陀仏——南無阿弥陀仏！そのとたん、焼けるような痛みが腿とお尻を刺しました。それでわたしは、板子を放し海へころがりこんでいました。その痛みは、大きなカツオノエボシのせいでした。……カツオノエボシをごろんになったことはないでしょうね。エボシ、つまり神主がかぶる帽子のような形をしたクラゲです。鰹がそれを餌にするので、わたしどもはカツオノエボシと呼んでいます。どこにでも、そいつが現れると、漁師は大漁を当てにします。体はガラスのようにすき通っています、がその下に紫色の縁飾りのようなものと、長い紫色の紐があります。その紐が触れると、痛みは大変なもので、長いこととれません……その痛みで、わたしはわれにかえりました。もしクラゲに刺されなかったら、わたしはそのまま目が覚めなかったかもしれない。わたしはまた板子に乗って、小川の地蔵さまと金比羅さまにお祈りしました。それで朝まで目を覚ましていることができました。」

「夜が明ける前に雨は止み、空は晴れてきました。それは星が見えたからです。明け方に、またも、うとうととして、頭をぶたれてわたしは目が覚めました。大きな海鳥がぶつかったのです。日が雲の

向こうに昇りはじめ、波は穏やかになっています。やがて小さい茶色の鳥が顔をかすめました——海岸の鳥です（名は知りませんが）。それで陸地が見えるに違いないと思いました。後ろをふり返ると山が見えました。わたしは、その形に見覚えはありませんでした。青く見えて——九里か十里は離れているように思われました。わたしはその山の方へ、水を掻いて行こうと決めました。もつとも、岸に着く望みはほとんどありませんでしたが。わたしは、またもや腹がへってきました——おそろしく腹がへって！

「わたしは、何時間もあるその山の方に向かって水を掻いたです。もう一度うとうとしました。そしてたらもう一度海鳥がぶつかりました。一日中水を掻きどおしでした。夕方近くになって、山の様子から、そちらの方へ近づいているのがわかりました。しかし、岸に着くには、二日もかかるだろうと思いました。ほとんど望みを失いかけたその時、ふと一隻の船——大きな帆船を見つけました。船はわたしの方へ向かってきます。でも、もつと早く泳がないと、その船はずっと向こうを通りすぎてしまうことがわかりました。助かる見込みは、もうこれが最後です。わたしは板子を捨てて、いっしょけんめい泳ぎました。船から二町ばかりのところへたどりつきますと、わたしは大声で叫びました。けれど甲板には誰も見え、何の返答もありません。あつという間に、船はわたしの向こうを通りすぎてしまいました。日は沈みかけています。もうだめだと思いました。すると突然、一人の男が甲板に出てきて、わたしに向かつて叫びました——『泳ぐんじゃない、からだを疲れさすな！——いま舟を下ろしてやるぞ。』それと同時に、帆を下ろすのが見えました。わたしは嬉しくてたまらず、もう元気百倍するようで、ぐんぐん泳いでいきました。それから船は小舟を下ろしました。小舟が近づいて来ると、一人の男が叫びました——『誰か他にいるか——何か落したものはいいのか。』わたしは答えました——『板子一枚だけ。』そのとたん、わたしは、すっかり力が抜けてしまいました。小舟にいる人たちが、わたしを引っぱり上

げてくれるのは、わかりました。が口もきけず、体も動けず、目の前が真っ暗になりました。」

「しばらくして、またも、あの声が聞こえました。福寿丸に乗り組んだ人たちの声です。——『甚よう！甚よう！』——それでわたしはぞっとしました。すると誰かがわたしをゆさぶって申しました。『おい！おい！そりやゆめだ！』——で、気がつく、わたしは、帆船のなかで、吊角灯カンテラの下に寝ていました（もう夜になっていましたから）。そばには見知らぬ年寄りが、一杯のごはんを手にもって、すわっておりました。『少し食べてみなよ』と、爺さんはたいそう優しく言いました。わたしは起き上がると思っただのですが、できません。すると爺さんは、自分で茶碗から食べさせてくれました。茶碗が空になると、わたしはもつと欲しいと言いました。が、爺さんは答えました——『今はいかん、まず眠ることだ。』爺さんが、誰かに向って言っているのが聞こえました——『わしが言うまで、もう何もやったらいかん。たくさん食わせたら死んでしまうからな。』わたしはまた眠りました。そしてその夜、さらに二度ごはん——やわらかに炊いた飯——を一度に小さい茶碗に一杯ずつもらいました。」

「朝になると、だいぶ気分がよくなりました。ごはんをもつてきてくれた爺さんがまたやって来て、わたしに色々聞きました。わたしどもの船が沈んだことや、わたしが海につかっていた時間のことを聞いて、爺さんはたいそう気の毒がりました。爺さんが言うのに、わたしは二日二晩に、二十五里以上漂流したのだそうで、『おまえの板子を探して、拾い上げておいた。たぶん、それをいつか、金比羅さまに奉納したくなるだろう』と爺さんは申しました。わたしはお礼を述べましたが、それは焼津の小川の地蔵さまに奉納したい、と答えました。わたしが、しよつちゅうお助けを祈ったのは、小川の地蔵さまでしたから。」

「その親切な年寄りは、帆船の船長で、また船主でした。播州の船で、紀州の九鬼の港に向っていました……クキという名前を書く、と、「鬼」の字を入れます——だからそれは九つの鬼という意味です

が……船の人たちは、みな大変親切でした。船に引き上げられたとき、わたしはふんどしだけの丸裸で、その人たちは、わたしに着物を見つけてくれました。一人はわたしに下着をくれ、もう一人は上に着るものを、またもう一人は帯をくれました。幾人かの人は、わたしに手拭や草履もくれました。そして、みんなで集めて、六、七両にもなるお金を恵んでくれました。」

「九鬼に着くと——そこは変な名前でも、感じのよい、小さな土地ですが——船長がわたしを立派な宿屋に連れていってくれました。二、三日休養すると、わたしは再び元気になりました。それから、その地方を治めている方、あの時代に地頭と呼んでいた人が、わたしを呼びに寄こし、わたしの話を聞き、それを書きとめました。地頭は、焼津の地頭に、ことの次第を報告しなくてはならん。その後で、おまえを送り帰す手だてを見つけよう、と言いました。しかし、わたしを救ってくれた船長は、自分の船でわたしを家へ送り帰し、地頭の使者の役を果たしたいと申し出ました。それから二人の間はかなり議論がありました。当時は電報も郵便もありません。九鬼から焼津まで特別の使者を送ったら、少なくとも五十両はかかったでしょう。ですが一方、こんな問題には特別な法律や習慣があり、法律といっても、今日のものとは大分違ったものでした。そうこうするうち、焼津の船が、近くの荒坂の港に入って来ました。そして、九鬼の女で、たまたま荒坂にいた者が、焼津の船長に、わたしが九鬼にいることを話しました。そこで、焼津の船が九鬼へやって来ました。それで地頭は、焼津の船長にわたしを預けて、実家へ送り帰すことに決め、この船長に令状を渡しました。」

「結局、わたしが焼津に帰ったのは、福寿丸が沈んだときから、およそ一か月たってからでした。わたしどもは夜、焼津の港に着きました。それでわたしは、そのまますぐ家へは帰りませんでした。帰れば家の者をびつくりさせたでしょうに。福寿丸が沈んだという確かな知らせは、そのころ焼津に届いていませんでしたが、船についていた物が、いくつか漁船に拾い上げられておりました。それに暴風が突

然やっできて、ひどく大荒れの海でしたから、福寿丸は沈んで、わたしどもはみな溺れ死んだものと信じられていました……他の者は誰一人消息はありませんでした……わたしはその夜、友だちの家へ行きました。そして朝になり、わたしの親と兄弟に知らせてやりました。そこで家の者がわたしを迎えに来てくれました……」

「毎年一度、わたしは讃岐の金比羅さまへお参りに行きます。難船して助かった者は、みんなあそこへお礼参りに行きます。それにわたしは、たびたび小川の地藏さまへお参りします。あしたそこへ、いっしょにお出で下されば、あの板子をお見せしますよ。」

第二十二回（平成二十四年度）小泉八雲顕彰文芸作品コンクール要項

【趣旨】 焼津に滞在し、焼津を愛した小泉八雲の業績を普及・顕彰するために八雲に関する作品を広く募集し、優秀な作品については表彰のうえ、作品集にまとめて発行します。

【主催】 焼津市教育委員会

【後援】 小泉八雲顕彰会

【募集作品】 小泉八雲を題材とした未発表作品であれば何でも構いません。

例えば、八雲作品の読書感想文、八雲への手紙や焼津小泉八雲記念館やゆかりの地をめぐるための感想などを含む随筆、八雲の研究論文、八雲を題材とした短歌・俳句・詩など。

【資格】 小学生以上

【募集期間】 平成二十四年七月一日から平成二十四年九月三十日（当日消印有効）

【募集条件】 小泉八雲を題材とした未発表作品。

全部門を通じて一人一編とし、短歌・俳句は五首または五句で一編とします。

いずれも四百字詰たて書原稿用紙を使用し、五枚以内とします。

ただし、研究論文については原稿用紙十枚以内とします。

ワープロ原稿の場合は、A4サイズ二十字×二十行（たて書）。

【応募上の注意】

- ① 作品は本人の自作で小泉八雲を題材とした未発表作品に限ります。
- ② 作品は楷書ではっきり書き、原稿に必ず**題名を書いてください**。
短歌・俳句も五首（句）をまとめた**題名を書いてください**。
小学生・中学生は鉛筆書きでも構いませんが、濃くはっきりと書いてください。
- ③ 作品には、必ず応募用紙をつけ、題名・氏名・年齢（児童・生徒の場合は、学校名・学年も記載）、住所、電話番号を記入してください。

また、読書感想文については、読んだ本の書名・編著者名・出版社名を記入してください。

- ④ 作品は、常用漢字、新かなづかいを原則としますが、短歌・俳句は旧かなづかいでも構いません。
- ⑤ ペンネームの使用もできますが、応募作品には本名も併記してください。
- ⑥ **上記要件に欠ける場合は、失格とする場合があります。**
- ⑦ 応募原稿は返却しませんので御承知ください。
- ⑧ 応募された作品についての問合せには応じません。
- ⑨ 入選作品の著作権は主催者に帰属します。
- ⑩ 入選者を含む応募者の氏名・所属・住所および作品に関する事項について、広報一般に使用・掲載されること及び報道に提供することを許諾するものとします。

【審査及び賞】

焼津市教育委員会が委嘱した審査員により小学生・中学生・高校生・一般の部別に審査を行ない、入選者には、表彰式において賞状及び記念品を贈ります。応募者には、表彰式後に作品集と参加賞を贈ります。

【発表表】 入選者におのみ、平成二十五年一月に郵送で結果をお知らせします。

【表彰式】 平成二十五年二月に、焼津文化会館で実施する予定です。

【作品集】 入選作品は作品集にまとめます。作品集に掲載する際には、明らかな誤字・脱字は訂正し、句読点やかなづかいについて、加除する場合があります。作品集には応募された全ての方の氏名等掲載させていただきます。また、入選作品は焼津小泉八雲記念館ホームページに掲載する場合があります。

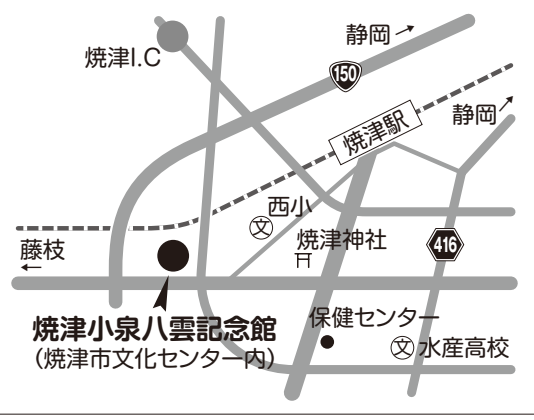
【応募・問合せ先】

〒425-0071 静岡県焼津市三ヶ名1550番地

焼津小泉八雲記念館 電話054-620-0022

URL <http://www.city.yaizu.lg.jp/yaizu-yakumo/index.html>

E-Mail koizumiyakumo@city.yaizu.lg.jp



所在地 〒425-0071 静岡県焼津市三ヶ名1550番地
 電話 054-620-0022 (FAX兼用)
 開館時間 午前9時から午後5時
 休館日 ●毎週月曜日(月曜日が祝日のときは以降の最初の平日)
 ●年末年始(12月29日から1月3日)
 ●展示替期間

事業内容 展示事業 常設展示・小企画展示
 講座・講演会・公演事業
 小泉八雲顕彰文芸作品コンクール事業
 小泉八雲関係資料整理事業

ホームページ <http://www.city.yaizu.lg.jp/yaizu-yakumo/index.html>
 主な展示品やイベント案内のほか、焼津に関連する八雲作品もご覧いただけます。

焼津小泉八雲記念館紹介

「焼津小泉八雲記念館」は、明治の文豪である小泉八雲を顕彰し、八雲が愛してやまなかったこの地「焼津」における足跡や地域の人々との交流や温もりあふれるふれあい、さまざまな創作活動などを広く伝えるため、焼津市文化センター内の焼津市立図書館南側に2007年6月27日(水)に開館しました。

第22回(平成24年度) 小泉八雲顕彰文芸作品コンクール応募用紙

題名	
ふりがな氏名	
年齢	歳 _____
住所	-
電話番号	
☆以下は読書感想文のみ記入 読んだ本の書名	
編著者名	
出版社名	



焼津小泉八雲記念館

第二十一回（平成二十三年度）
小泉八雲顕彰文芸作品
コンクール入選作品集

平成二十四年二月 発行
編集 焼津小泉八雲記念館
静岡県焼津市三ヶ名一五五〇
発行 焼津市教育委員会
静岡県焼津市宗高九〇〇

表表紙

日本に向けニューヨークを出るハイン
（同行者ウェルドンが記憶によって描
いたスケッチ）

裏表紙

八雲が描いた焼津海岸の風景

